

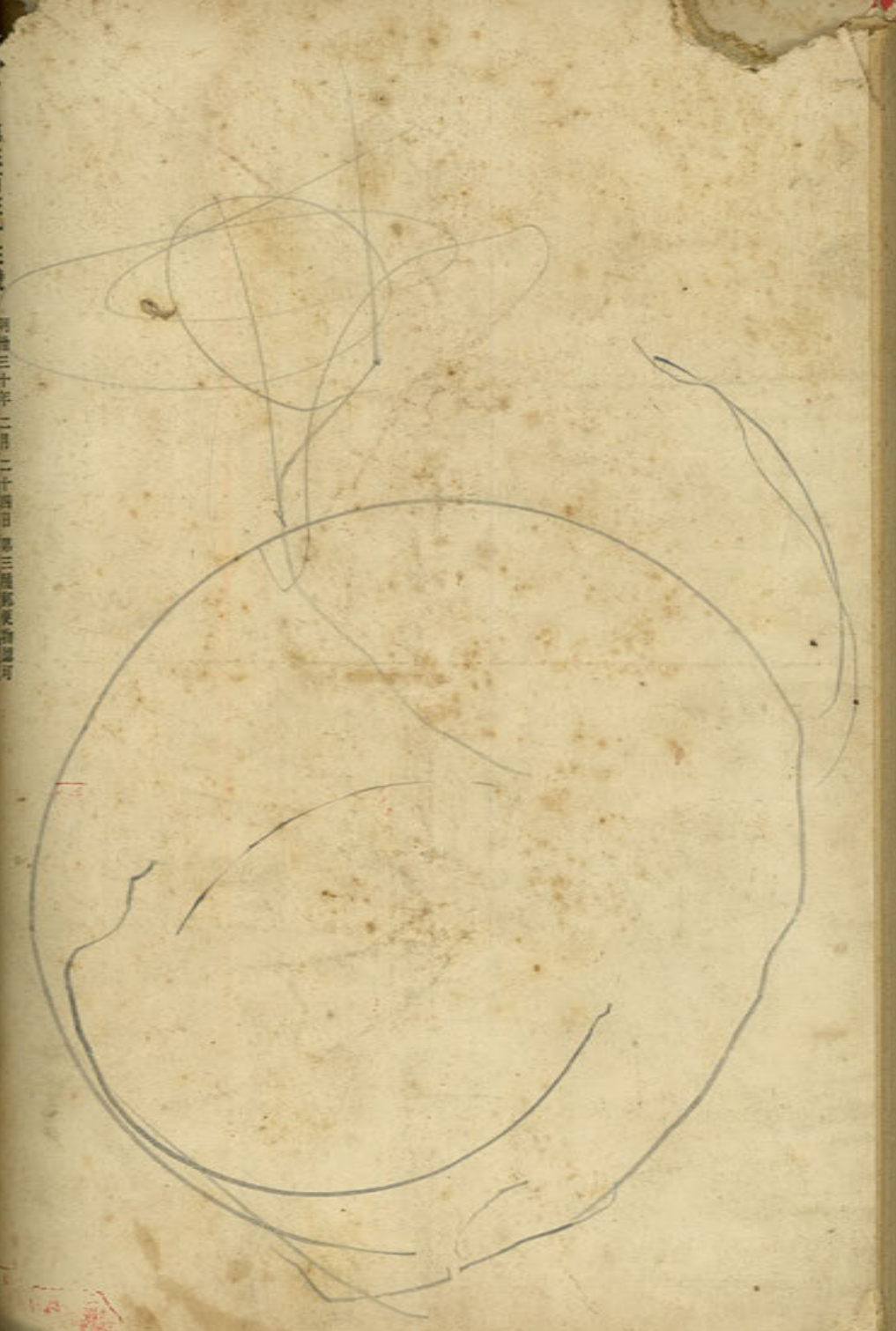


次 目

調 示	法華經の眞價	浄土三部經の教意	日蓮主義より見たる無量壽經	文、母と小鳥	記事報道	法華經要文講義(續)	那先比丘經通解(續)
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
本多日生	森川日修	井村日成	古田昂生			本多日生	本多日生

號月一十年六廿第

第三十三號 明治三十年二月二十四日 第三編 野矢美津雄編



時、正に大正十一年十月十  
三日、朝廷吾祖日蓮聖人の  
高德を表旌せらるゝの思  
召を以て**立正大師**  
の諡號を勅賜せられる。

大正十一年十月十三日大師號追賜の日に、顯本法華宗管長大僧正  
本多日生現下は左の訓示を宗内各寺院に宣布せられた。

## 訓示

### 宗内一般

理想的文化ノ建設ニハ人心教化ヲ大本トシ前提トス、是レ大聖釋尊ノ王位ヲ避ケテ成道ヲ遂ゲ、正法輪ヲ轉ジテ、最大ノ宗教ヲ顯示シ給ヒシ所以ナリ、又國家ノ健全ナル發達ニハ民心善導ヲ最要トシ、之ガ爲ニハ正法ヲ興立シ、王法佛法ノ冥合ヲ期スルヲ經國ノ要諦トス、是レ日蓮聖人ノ心血ヲ瀝イデ立正安國ノ大義ヲ唱道セラレシ所以ナリ、顧ミテ現代文運ノ趨勢ヲ視、心ヲ潛メテ我國民心ノ歸嚮ヲ察スレバ、俱ニ此大事ヲ忘却セルモノノ如シ、故ニ文化運動ノ叫ビ喧シクシテ、却テ理想的文化ニ遠ザカラントシ、又民心善導ノ聲盛ンニシテ而モ民心ハ日ニ頹廢ニ傾カントス、是レ實ニ現下ノ最大恨事ニアラズヤ、然リ此風潮ヲ轉換シテ文化ノ大本ヲ尊重シ、經國ノ要諦ヲ自覺セシムルニハ、一種強大ナル刺激ナカルベカラズ。

此重大ナル時機ニ際シ、我が皇室ハ日蓮聖人ノ高德ヲ表旌シ、特典ヲ以テ立正大師ノ諡號ヲ宜シ給ヘリ、此盛儀ヲ拜シテハ、豈啻崇敬者幾千萬人ノ欣喜スルニ止マランヤ、廣ク國民一般ヲ警醒スルノ效實ニ多大ナルモノアラン、我等立正大師門下

ノ僧俗ハ、愈々益々精勵シテ追實ノ

聖旨ニ奉答シ、立正大師ノ遺教ヲ發揚シ、以

テ立正安國ノ實現ヲ期シ、進ンデ理想的文化ノ建設ニ寄與セズンバアラズ、而シテ此責任ヲ全フセントスルニハ、先づ各派ノ融合ヲ念トシ、僧俗ノ異體同心ヲ重ンジ、清新ナル時代適應ノ教化ヲ盛ニシ、此好機ヲ一轉期トシテ舊來ノ陋習ヲ脱却セズンバアラズ。

謂フニ我が佛教ハ、其教義ニ於テ完備卓越セルハ頗ル明白ナルモ、其組織ニ於テ、其運用ニ於テ、其活動ニ於テ、其宣傳ニ於テ、幾多ノ缺陷ト弊風トヲ存シ、效果ノ上ニ遺憾多シトセズ、今ヤ時代ハ各方面ニ亘リテ一大刷新ヲ促シツツアリ、此際此時一大覺醒ノ下ニ其組織ヲ考慮シ、其運用ヲ敏活ニシ、其活動ヲ旺盛ニシ、其宣傳ヲ適切ニシ、以テ此時機ヲ善用セズンバアラズ、今回尊號ヲ追賜セラレシハ是レ實ニ法運開發ノ一大佳會ナリトス、若シ徒ラニ此佳會ヲ空過スルコトアランカ、其實決シテ輕シト謂フベカラズ、僧俗一般能ク此趣意ヲ體セヨ。

大正十一年十月十三日大師號追賜ノ日

顯本法華宗管長 大僧正 本多日生

宗令第八號

宗 内 一 般

立正大師ノ設號追賜ヲ記念シ、追實ノ聖旨ヲ奉戴シ、聖人ノ遺教ヲ發揚シ、以テ立正安國ノ祖願ニ寄與シ、衆生濟度ノ佛意ニ契合セシメンガ爲ニ、本宗僧俗全部ノ一大結合ヲ形成シ、異體同心ノ活動ヲ爲スヲ目的トシテ、茲ニ「立正結社」ノ組織ヲ命ズ。結社ニ關スル趣意書及規約等ハ別ニ之ヲ發布ス。

大正十一年十月十三日

顯本法華宗管長 大僧正 本 多 日 生

法華經の眞價 (一)

本 多 日 生



時 言

これより「法華經の眞價」と題してその大體を申述べる考てあります。法華經が過去の文明に於て如何なる貢獻を爲したかと云ふ事を考へまするに、殊に我國に於ては偉大なる貢獻を爲したのであります。我國の文明史を通覽致しますれば、奈良朝の時に文化の芽がふいて、平安朝に於て花が咲いた譯てあります、その奈良の都に芽をふく時分から法華經の力が非常な關係を持つて來たのであつて、宗旨としては奈良に六宗と云つて、法華經以外の宗旨がありましたけれども、それは小さなものであつて、奈良朝の文明の基礎を成して居るものは無論聖德太子であります。宗派と云ふ名前から言へば、法華經は表面には出て居りませぬけれども、聖德太子の佛教興隆の力は、奈良の色々の宗旨よりは餘程我が文明には關係が多かつたのであつて、その聖德太子が如何なる主義で居られたかと言へば、非常に廣い主義ではありますけ

れども、その廣いと云ふのも法華經から出て居るのであつて、思想の開顯は法華經に依られたと云ふことは是は争ふ餘地の無いこととあります。而してその聖徳太子の思想は、上は朝廷を動かし、下は一般民衆の上に及んだものであります。それ故に、奈良の文明に就ては法華經が日本の文明に直接の關係を持つたと言つて宜いので、華嚴宗とか三論宗とか律宗と云ふやうなものは、小さな宗派團體としては存して居つたけれども、我が國の一般的文化には大した影響は無いものと言つて宜いと思ひます。

又平安の都に於て我が文化の花が開いた時は、申す迄もなく傳教大師が法華經を中心として文化を進められたのであつて、その後には宗旨としては眞言宗も出來、或は淨土宗、禪宗も出來たけれども、是は所謂宗派であつて、日本の文化の正統ではない、到

す。

所がその後鎌倉の世となり足利の世となり徳川の世となつて來る間には、色々の變遷を経ましたけれども、要するに我國文化の正統が亂れて來たのであつて、平安朝に發達した程の精神文化は鎌倉以後には見ることが出來なくなつたのであります。それ故に法華經の眞價を失ふやうな有様になつて參つたのであるが、こゝに於て日蓮聖人が出られて、傳教大師が平安朝の時に法華經を用ゐられたやうに、又聖徳太子が奈良朝の時に法華經を用ゐられたやうに、一般的に日本文化の中心に法華經を採用しなければならぬと力説したのであります。唯だ一つの宗派を立てる運動でなかつたことは、聖人一代の言動に徴して頗る明白なことであります。言葉を換へて言へば、日蓮聖人の運動は、法華經の眞價を日本文化の中心

底傳教大師が比叡山を開いたやうな文化的意義を持つて居るものではない。それ故に朝廷には深く法華經が入つて居るのであつて、今日に至るまで朝廷の佛教に關する中心思想は法華經である。隨つて朝廷に行はるゝ總ての佛事供養は、法華經中心の法要であり、所謂法華八講と稱して、何れの宗派の僧侶が來ても法華經以外の話をするものが出來ないことになつて居つた。左様な次第で我國の文學に於ても深き關係を有するものは法華經であります。又名ある人が寫經と云つてお經を寫したのを御覽になつても總て法華經であります。少しは他のお經もありませんけれども、それは部分的のことで、相當な人が佛教に歸依した記念を遺すには、宗派の異同を問はずして法華經であります。それ故に我國の文化の正統として、非常に深く法華經が關係を有するのであります。

に立てるやうにしたい、日本の文化運動として法華經中心の思想を復活したいと云ふのが聖人一代の主張であります。その意味合を諒解した者もあつて弟子となりましたけれども、併し日本文化の中心とする意味合に於て日蓮聖人の主張を採用することが出來なかつた爲めに、日蓮聖人は非常に慨嘆して、遷化せられたのであります。弟子信者の數から申せば相當に弟子もあり又信者も増加しつゝあつた譯でありますけれども、さう云ふ部分的の事を目的にしたのでなくして、日本文化の正統中心に法華經を信奉しなければならぬと云ふ事を力説して居つたのでありますからして、その目的を達せずして入滅せられたと云ふので、當時日蓮の弟子が叫んだのはそこであつたのである。信徒を得て満足するとか、寺が建て満足すると云ふやうな考は、日蓮の教を直接に

受けたる者の間には無い思想であります。其事が國家諫曉と云ふ名に依つて傳はり、苟もその當代に於ける日蓮主義を代表する人物は、國家諫曉の運動をやらなければならぬと云ふことに相成つて居つたのであります。大體引續いてその事は實行して來て居つたのである。私共は顯本法華宗と申して居りまするが、その開祖は日什正師と云ふのであり、是は長らく比叡山の學頭を勤めて、功成り名遂げて會津に閑居せられて居つたのであるが、日蓮聖人の遺文を拜して再び起つて運動を起された、それが六十八歳の時である。その運動はどう云ふ事をなされたかと云ふと、京都に出て、政治の中心である人に向つて、我國文化の中心に法華經を採用しなければならぬと云ふ事の運動を爲さつて、武家に勢力があることに就ては武家に向つても諫曉せられて、前後六回諫

曉せられて居ります。八十歳に至つて亡くなり、その二箇月前迄はその運動を繼續して居ります。亡くなりますると日實日仁と云ふのが相踵いて一周忌にその趣旨を貫徹すべく運動して居ります。非常に迫害を受けて居りますけれども、その運動の根本精神を申しますと今日の所謂國家の風教確立であります。文明の理想を法華經の主義から採用しなければならぬと云ふことからあつたと思ふ。それ故に、法華經の眞價は、文明の理想の原則を教へると申しまするか、その文明の理想を指導する所の標的として存する所のものであると云ふが、大體法華經を奉戴して居る者の主張である。それが幸に我國の過去の文明、奈良朝より平安朝に至つては認められて、一時日本の精神的文化が旺盛を極めたと云ふのは法華經的文明であつたと言つて宜い。日本の精神的文

化が衰へた時は段々法華經に遠ざかつたからであります、今日は法華經復活の曙光が見えて居るやうであるけれども、今尚ほ深刻に法華經の眞價を認め人々が感ないのは、それだけ日本の精神的文明に賢明ならざる所があると云つてよい。

將來の文明に就ても、法華經が文化の理想に就ての原則を教へることに於て、他の學說や思想よりも秀でて居るのである。今日の人々が迷うて居る今後の方針は、法華經に依つて導かるべきものであると云ふことが、はつきり言ひ得らると思ふのであります。果してさうであるとするならば、法華經の眞價はどれ程のものか云ふ、相場を付けることの出来ない絶対の眞價を持つてあります。總ての人類の彷徨うて居る針路を指示するものである。總ての人々が悩んで居る文化の原則を指示するものであつ

たならば、是程偉大なるものはない。私はこの意味に於て法華經の眞價を認めなければならぬと思ふ。先づ日本の文明が之を採用し延いて世界の總てが法華經に歸伏する時に於て、人類は眞の幸福に達し得ると思ふのであります。その事は廣い問題でありますから、漏れなく申述べることには時間の容さぬとてありますし、又複雑なる問題と相成ります。故に、總てをお話することは出来ませぬが、その中の重大なる問題に就て、之を立證して見やうと思ふのであります。

文明の原則と言ふと、非常に大きな問題でありまするが、併しそこに明白なるものが存して居ると思ふ。それは何であるかと言へば、吾々の現實の生活と理想の生活と云ふものが、兩面共に完全に示されて居るならば、それが文明の基礎であらうと思ふの

文明の原則と言ふと、非常に大きな問題でありまするが、併しそこに明白なるものが存して居ると思ふ。それは何であるかと言へば、吾々の現實の生活と理想の生活と云ふものが、兩面共に完全に示されて居るならば、それが文明の基礎であらうと思ふの

であります。吾々の文明なるものは、目的を完成する爲めに建設されて行くものであります。吾々の目的と云ふものは、今の所謂實際生活現實生活と云ふもの、上に於ての満足と、吾々人間が理想の上に、精神的に要求して居る所の満足との二つてあります。人類の永い間の歴史は何を繰返して居るのであるかと云へば、一つは精神的満足を遂うて進んだので、之も人類の永い歴史に亘つて居ることであります。西洋の文明を二大別して考へますれば、非常に精神的の方面に於て發達をして、宗教の旺盛を極めた、羅馬の國家も滅びてしまつて、總て宗教の全盛時代となつて、千有餘年の間は總ての文明は宗教に支配されたと云ふが如きは、精神を表にしたる所の文明であつたと言ひ得るのであります。そこに一つ弊害を生じ又他の要求が起つて、終に宗教萬能の文

明を打破つて近世文明なるものが開けて參つた。その間に調和を圖つたことがあるけれども調和が保ち切れずして是が衝突となり、遂に今日の結果に至つて居るのであります。その宗教から絶縁するには、最初一方には法王と云ふものがあつて宗教が政權を有つて居つたのである、その政權と分離する爲めに國家と云ふ形を成して宗教と分れて參つたのである、是が宗教と政治の分裂と云つて宜いのである。それが調和されずして遂に衝突して次第に宗教の權力を奪ひ、政治と云ひ國家と云ふもの、色彩が濃厚に現れて來たのである。又一方學問の方に於ては、哲學科學と云ふものが勃興して參つて、宗教の支配して居つた人間の知識の方面の支配權を學問が取つて、獨立して寧ろ宗教を擊退して今日の文化は發達して來て居るのである。一方には人間の欲望が物質

の方に走せて參りましたが爲めに、宗教に依つて精神的に満足して居つた方面は忘れられ、人間の物質的欲求が強く現れて來ましたからして、生産若くは經濟と云ふやうな方面がそこに勢力を得て參つて、宗教で論じて居つたやうな事は、壓迫されるに至つて居る。其等の政治と云ひ學問と云ひ、經濟と云ひ、色々名前はありませんけれども、それは大體先づ物質的生活の方面に向つての努力であります。政治の全部も殆んど物質の問題である、學問も哲學と云ふやうなものは段々稀薄になつて科學となり、科學も亦理化學と云ふやうなものが發達して來て物質生産の上の學問が旺盛になり、政治上の法律と云ふやうなことも財産の問題、權利利益の問題を中心として發達して來て居る。經濟問題は勿論殆んど全部物質上の問題であります。此等が皆宗教から分れた

ので、要するに物質の文明となつたのであります。斯くして西洋の文明史は、非常に長い歴史を経て居るやうであるけれども、先には精神上に偏寄り過ぎたる文明であつたのが、そこに弊害を生じて今度は物質文明となつた。その物質文明は今日より先づ四五十年程以前からして非常に濃厚に現れて參つたのであります。日本で申せば明治十五年の頃からして、殆ど精神上的の文明と云ふものは顧みぬやうになつて、滔々として物質化して來て、日本で申しても、あ寺に詣ることを忘れ數珠を持つことを忘れるやうな人達が澤山出來たけれども、あの時代と同じやうに世界が擧げてさう云ふ風に物質的の方面に傾れたのであります。その結果が茲に押寄せて今度は物質文明の破綻と云ふことになつた譯であります。今日に尙ほ物質の問題が中心の問題だと思つて居るのは、

已に時代後れの考へてあつて、實際今の問題は、物質偏傾の文明に就て、その失敗の跡始末をすることに進んで居るのであります。

そこでこの二つの病弊と云ふものは、是は文明を構成する所の原則に背いて居る。古き基督教に於て理想したやうに、この人類の世の中は、單に宗教のみに依つて完成すると云ふことは到底出来ない。又その後についた物質偏傾の文明のやうに、精神の問題を軽んじて、権利利益をのみ主とする結果は、種種なる争奪を生んで、國と國との間には色々なる手段に依つて利權の争奪が行はれ、戦争ばかりではない、種々なる外交の手段に依り、其他種々なる陰險なる手段が行はれ、殆んど吾々の窺ひ知れないやうな運動が断えず國と國との間には行はるのである。その裏表の虚々實々の術策は實に恐るべきもの

て之に當らなければならぬ。さう云ふ事が總て人間の幸福を破壊してをるのである。それが即ち物質文明の弊害であるからして、宗教が全盛を極めて、善男善女を集めて無闇にお札などを賣つて、さうして人を愚昧にする文明でも、到底人間の幸福が得られないけれども、今のやうに、一概に権利利益を逐つて、法律と經濟のみに傾くのも、幸福が得られないのは、是れ亦明白なる事實である。共に是は理想の文明ではない。それ故に、今の文明の姿に於て如何なる原則を採用すべきかと云へば、是は言ふまでもなく物質的文明の長所と、精神的文明の長所と相互に尊重して、さうしてそれを適當に調節して進んで行くことより外はないのである。それが少しでも不調和の状態にあつたならば、必ずや失敗に歸すると云ふことは極めて明白である。今日文明の改造を叫

があると云ふ。國內には階級の戦ひとなつて、大體は資本労働の問題として現れて居ります。けれども、嘗に資本と労働との争闘のみではなく、今日商人と商人との間に於ても商戦の陰險なる状態は年と共に激甚となり、又商業でなくとも、例へば官吏なら官吏が、奉職の途を得る爲めに、或は他を排擠すると云ふやうな事柄に就ては、それは實に年と共に激しい有様になつて行くのである。由つて以て人間の幸福を破壊し、人をして不安に導くのである。唯だ労働問題のみが不安の状態ではない、總ての事が油断をすればそこにどんな面倒が起るか知れない家主と借家人との關係に於ても、借家賃を拂はないて理窟を言ふ、おまけに立退料を請求する、さう云ふ事があるものかと言つても出ないから面倒になる。又家主が横着て惡辣なることをやれば、聯合し

んで居る中にも、精神の文明を全然度外視して、解決が付くと思つて居る人もあるが、それは短見者流のことである。資本家の持つて居る権利の幾分を労働者に渡し、資本家の得て居つた利益を幾分か労働者に渡したからと言つて、決してこの争が終りを告げるものではない。それは大切な問題には相違ないけれども、左様な事て此等の不安が除かれるべきものでない。又権利の主張を認めて、例へば選舉權を擴大すると云ふことに依つて、それで眞に吾々の幸福が保障されるかと言へば、決してさうでない。擴大された所のその権利が如何に利用せらるゝか、是れ亦陋劣なる手段に依りて如何様にも悪用せらるゝものである。何等そこに堅實なる保障を與へることは出来ない。輿論の發達したる國に於ても、その輿論なるものは必ずしも眞正なるものでないのでは



る。故に今日の文明の大切な事は、勞働問題でもなければ、民衆の権利の問題でもない。それは放擲すべからざる問題ではあらうけれども、決してそれが根本の問題ではない。第一の根本問題は、總ての人々が、この文明の原則を理解して、その大原則に對しては絶対に遵奉して行くと云ふ信念を持たぬ限りには、この文明は平和に解決することは出来ぬであらう。今迄のやうな偏寄つた理想に立つて、さうして互に術策を用ひて居る冷かなる人間は、天の膺懲を受けて永遠に不安の状態に置かれるのではなからうか。心得が違つて居るから到底安心の域に達することが出来ないであらう。それ故にどの國でもその不安の状態を脱することは出来ぬ。世界見渡す限り何れの國が安定を得て居るか、幸福を得て居るか、少しも羨む程の國は無い、まだ比較的の日本は

神文化に就て缺點のある所を攻撃するのである。例へば般若經的理想を以て、之を文明の原則として説けば、中世以前のやうな偏傾した文明が現出して來る、色即是空空々寂々であるから、さう云ふ思想が文明を支配するに至つたならば、その國は衰へ、その國の進歩幸福は無くなる。又阿彌陀經のやうな教でも、あれは未來世に偏傾して居る、厭世的色彩がある。又理智の研究が淺薄であるから、知識の文明が開けて現在を尊重しなければならぬと云ふ自覺が起つて來れば、あゝ云ふものは勢力を失ふて來る、それが残つて居るのは、それは實際から掛離れた過去の老人が、南無阿彌陀佛を言つて居るのである。現在に生存して居る血の通つて居る人間は、それに於て満足しない、さう云ふ宗教ではいけない、斯う云ふ思想に依つたならば人間の幸福は無いと云ふこ

平和を保つて居るのである。それすらも今日の如き状態になつて、是が年と共に不安に赴くのである。それは文明の正しい原則を理解する人が少ないからである。他の言葉を以て言へば、小さな學問や理窟は知つて居るけれども、偉大なる意味に於ての賢明なる人が少ないのである、大切な問題を棄て、居るのである。その大切な問題は只今申す法華經に最も明白に示してある所の思想であつて、宗教が偏寄つた意味に於て迂遠な信仰教義を鼓吹すること、一方は物質文明に偏傾して權利利益を極端に主張すること、是が人類を累する所の最も著しいものである。所が法華經と云ふ經典は、この二つに對して極力反省を促したる所の教義であつて、諸君が嘗てより御承知であらうが、法華經が平凡の教を攻撃し又は之を開顯すると云ふのは何事かと言ふと、是は精

とになる。又一方物質に偏傾するのはいけないと云ふことは、是は法華經に於て強く教へられて居ることであつて、法華經は一乘の教と云つて、政治なり經濟なり、人生に必要なものは無論認めるけれども、それが高遠なる理想から離れ、健全なる宗教の信仰から離れた時に於ては、駄目であると云ふ事を最も強く説いたものである。總て其等が、正法に順ずと云つて、偉大なる精神的文明に握手して行く時に於て、始めて人生に效驗がある。それが偉大なる宗教、偉大なる理想と離れた時には、單に政治とか經濟を以ては決して人間の幸福を齎すものでないと云ふ事を、明示して居るのである、そこに一乘の教義をはつきり示して居る。聖徳太子が法華經を日本の文明に採用されたのも、その點からである。我が國民が最初に佛教を入れたのは、決して未來往生の

爲めてもなければ、又迷信的利益の爲めてもない、健全なる文明を發達せしむるには、法華經の如き文化の原則を示すものが無くしてはならぬと云ふ理解からして、日本は法華經を採用したのである。當時佛教を入れた思想と云ふものは明かにさう云ふことであつた。その事の意味合は幾らでも證明されるのである、四天王寺を建てたのも法隆寺を建てたのも延暦寺を立てたのも、是は決して今日考へる様な未來觀の宗教でもなければ迷信的の宗教でもない、日本の文化を導く所の標的として此等の寺が建つたのである。それは法華經がさう云ふ精神であるから、その法華經に教へられた事を、現實に現して來た時に、さう云ふ風に文化現象が起つて來たのである。

前に申しましたやうに、日蓮聖人の絶叫したのもこの意味であつた、それ故に法華經を信する意味合將來に於ても光を放つ所以である。

前に言ふ通り、今日法華經が大發展をしないのは、それだけ日本人が賢明でないからである、日本人が賢明になつた時には、必ず法華經は大發展をする。一切人中に於て法華經を信する人は最第一なりと釋尊は説いて居るが、確にそうである。この點に於て法華經は、今日及び將來に對して非常なる價値を有つて居り、又その價値が認められて來るであらう。

所が今度の行止りが尋常のことでないから、如何に不眞面目な人間も眞劍に考へるやうになつたであらうと思ふ。今迄は「法華經などは嫌いです、私は眞宗です」と云ふやうなことを言つて居つた。團子が好きか蕎麥が好きか「私は蕎麥が好きでございます」と云ふやうなことでやつて居た。「阿彌陀經、

は、決して般若經を信じたやうな、超世間的と云ふか、退嬰的、悲觀的、消極的なるものではない。法華經を信じたる日蓮聖人は勿論であるが、その他清正公であらうが、光園卿であらうが、法華經の教義に達した者は、皆血の通つた活躍した人物である、前に申したやうに、實際生活の上に力を現して居る人である、さうして半面には非常に高遠なる理想と信仰とを持つて居る。是が法華經に導かれた人格の共通點である。この法華經より離れて居る學者と云つたならば、今の所謂唯物的色彩を帯びて居る法律とか經濟と云ふやうなことになる。又法華經より離れて居る宗教と云ふことになる、般若心經であるとか阿彌陀經であるとか、大本教であるとか云ふやうなことになる、斯様な思想を以て文明の原則とすることは出来ない。この點がどうしても、法華經が

それも結構である」と言つて居たが、今日はさう云ふ無批判なことでは濟まなくなつたのである、眞劍勝負になつたのである。まだ日本は眞劍勝負を味ふことが薄いけれども、是が性根に滲み込む程經驗する時代が來たのである。物質文明に就ては激しい弊害が見えて居るけれども、未だ分らない人も居る、これだけ押切つて行けば實に恐るべきことが起るであらう。現在修羅の巷となりつゝあるが、更に餓鬼の巷、地獄の巷となり、實に身顛ひするやうなことが起つて來るであらう。是てはいかぬと云つて眞の反省心が起つて來るであらう。その時に何れに行くべきか、眞逆空々寂々に戻る譯にもいかない、そこで本當に考へる。その時に役立つものが無かつたならばそれ程失望なことはあるまい。



# 浄土教と厭世思想 (承前)

## 浄土三部經の教意

森川日修

浄土三部經とは、無量壽經二卷、觀無量壽經一卷、阿彌陀經一卷であります。此の三經を以て法然親鸞は、釋尊の本懷、至極究竟の妙典としてをります。今此の三經に就て考察して見ますに、無量壽經の上卷に、阿彌陀の前身法藏比丘の發心と、四十八願、阿彌陀の異名、極樂莊嚴の狀況、同下卷に世相の弱肉強食、愛憎怨恨、鬭爭、不安、懊惱等を説く、觀無量壽經には、韋提希夫人の發願、十六觀を説き、阿彌陀經には、極樂の狀況、六方諸佛の稱讃を説く、無量壽經の上卷に、久遠に鏡光如來あり、大

第一に幾十の如來を経て、世自在王如來に至り、法藏と稱する國王あり、發心して世自在王の弟子となり、國中の人天悉く眞金色にならずんば正覺を取らず等の四十八願を興し、終に成佛して阿彌陀如來となつたとある。經に

阿難佛に白さく、法藏菩薩、すでに成佛して、滅度を取りたまひきとやせむ、未だ成佛したまはずとやせむ、いま現に在しますとやせむ。ほとけ、阿難に告げ玉はく、法藏菩薩今己に成佛して現に西方に在しませり、此を去ること十萬億刹なり、

其佛の世界を名づけて安樂と云ふ、阿難また問ひたてまつる、其佛成道よりこのかた、いくばくの時を運とかせむ。佛の言まはく、成佛よりこのかた凡そ十劫を歴たり。

阿彌陀の現狀は明瞭である。四十八願の中第十八願は、浄土家の最重要と認むる大願である。經に

設我れ佛をえたらむに、十方の衆生、至心に信樂して、我が國に生ぜんと欲して、乃至十念せむに、若し生ぜずば、正覺をとらじ。たゞ五逆と、正法を誹謗することを除く。

無量壽經では、彌陀は、五逆の人と、誹謗正法の二類を除外してをるが、觀經では、單に誹謗正法のみ除外し、五逆は救ふことになつてをる。親鸞之を巧妙に疎通してをる。

問ていはく、なんらの相かこれ誹謗正法なるや、答て曰く、佛もなし、菩薩もなし、菩薩法もなしといはん、是のごときらの見をもて、もしは心に自ら覺り、もしは他にしたがひて、その心を受けて決定するを、みな誹謗正法となづく、問ていはく、是のごときらの計は、たゞこれおのれが事なり、衆生においてなんの苦惱ありてか五逆の重罪にこえんや、こたへていはく、もし諸菩薩、世間出世間の善道をときて、衆生を教化する者ましまさずば、あに仁義禮智信あることをしらんや。かのごとき世間の一切善法、みな斷じ、世出世の一切賢聖みな滅しなん、汝たゞ五逆罪の重たることをしりてしかも五逆罪の正法なきより生ずることをしらず、このゆへに誹謗正法はその罪最重なり。親鸞の解釋によると、正法とは佛菩薩の世間、出

世間の善道を見て、正法を軽く、且つ漠としたものであるが、彌陀の力も及ばずと除外せし所以は、か  
く輕きものにあらず、淨土三部經の教意より一層完  
備せる教法あることを示したる伏線と見ねばなら  
ぬ、故に善惡邪正を撰ばず救濟せむとの彌陀と、佛  
陀の根本義たる教法を誹謗せん人は往生できざる意  
を説きたるものにして、餘程意義深長の者と見ねば  
ならぬ。

四十八願の中第十二に「設し我佛をえたらむに、  
光明よく限量ありて、下百千億那由佉諸佛の國を照  
らさざるに至らば、正覺を取らじ」第十三に「設し  
我佛をえたらむに、壽命よく限量ありて、下百千億  
那由佉劫に至らば、正覺をとらじ」とある、此れて  
彌陀は光明無量、壽命無量であることと見ることがで  
きる、光明無量は横に無限を語り、壽命無量は縦  
て、結局釋尊の佛智佛見を一人格化したのがそれであ  
る、故に教理的に説けば彌陀は釋尊の化身と云はる  
、次第である、其を釋尊が彌陀の應現などと思ふに  
至つてはさたの限りである。

しかし普通の人情は、未見の者は總てよく思ふ者  
で、舶來品と云ふと何んとなくよく思ひ、和製と云  
ふと粗品と思ふ、テームスの流れに船を浮べ兩岸の  
眺めを美文にかゝれると、隅田川のボートレースは  
無趣味に思ひ、寫真で見ると何れも七寶莊嚴の所で  
あるように見てものであるから、厭離穢土、欣求  
淨土の他力思想も感情的にはむりならぬ譯で、まし  
て法然親鸞もばあたりにも他力を主張したもので  
なく、熱烈なる求道者であるから、人をひきつけた  
は無理でない。

極樂の相貌狀景に至つては、洵に美を盡くし、善

の無限を示してをると見らるゝ、親鸞之を解釋し  
歸命は南無なり、無碍光佛は光明なり、智慧な  
り、この智慧はすなはち阿彌陀佛なり。

と云ふてをる、又た經に無量壽佛の異名として、無  
量光佛、無邊光佛、無對光佛、智慧光佛、歡喜光  
佛等と總て、光と智慧の異名を擧げてをる。

そこで阿彌陀の語原、法藏の意味を考察せねばな  
らぬ、阿彌陀とは無量壽、又は無量光を意味し、法  
藏とは願耶緣起から來たものである、阿願耶は無漏  
又は藏と翻譯せらるゝもので、法とは一切の諸法を  
意味し、阿願耶識中に一切諸法を含有する處が、法  
藏であり、人格的に云へば因位の菩薩で、法藏比丘で  
ある、この法藏を覺悟し體達し、十方無礙、絕對常  
住を徹見し玉ふた智慧の光が實は阿彌陀である。故  
に此の智慧、此の光を人格化せば阿彌陀如來であつ

を盡くし、譬喩と教法を織なせる説法は、人の渴仰  
を得せしめる。

無量壽經の極樂の相貌は絢爛たる美文にして、本  
邦に於ける、繪畫、刺繡、建築等に多大の影響を與  
へたものと思はるゝ、現に眞宗信者の佛壇が特に善  
美を盡くしをる心理關係は欣求淨土に基いたもので  
あると思はるゝ、しかし本經は余り長文であるから  
阿彌陀經の一部文を引用しやう。

舍利弗、極樂國土には、七寶の池あり、八功德  
水その中に充滿せり、池の底には、純ら金沙を以  
て地に布けり、四邊に階道あり、金、銀、瑠璃、  
玻瓈をもて合成せり、上に樓閣あり七寶を以て嚴  
飾せり。池の中に蓮華あり、大さ車輪のごとし、  
青色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には  
赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり、舍

舍利弗、極樂國土には、是のとき功德莊嚴を成就せり。

舍利弗、かの佛の國土には、常に天樂を作す、黄金を地とせり、晝夜六時に曼陀羅華を雨らす。其の國の衆生、常に清旦を以て、もの／＼衣被を以て、諸の妙華を盛りて、他方十萬億の佛を供養す、即ち食時を以て、還りて本國に到りて、飯食經行す、舍利弗、極樂國土には、是のとき功德莊嚴を成就せり。

舍利弗、かの國には、常に種々の奇妙なる雜色の鳥あり、白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり、是のもろ／＼の鳥、晝夜六時に、和雅の音を出だす、其のこゑ、五根、五力、七菩提分、八聖道分、かくのごとき等の法を演暢す、其の土の衆生、この音を聞きをはりて、皆ことごとく

音樂聞こえ、池に蓮華あり、晝夜華雨り、食自然に來り、衆鳥妙音を囀り、微風徐ろに來る、誰か之を欣ばざらむや。患難苦惱に満てる人生を去り、一日も早く九品淨土に往生したきものよ、法然親鸞よくも人々を攝取せしことよ。

併し此の極樂淨土の説相を靜かに諦觀せよ。此の美文の中に織込める教法を、七寶と云ひ、八功德水と云ひ、衆鳥の妙音と云ひ、是れ皆な譬喩にして、七寶とは、七覺支を表し、八功德水とは、苦、空、無常、無我、諸波羅密、念佛、念法、念僧をさすものにして「觀無量壽經」に「波は自然の妙聲を掲ぐ、其の所應に隨ひて、聞かざるものなし」とある、此れ全く釋尊の説法を波に譬へ、四諦、六波羅密等の教法を説かれたものである。又た鳥の音は、晝夜六時に五根、五力、七菩提分、八聖道分を演暢すとある。

とく、佛を念じ、法を念じ、僧を念ず、舍利弗、なむち、此の鳥は、實に是れ罪報の所生なりと謂ふことなかれ。ゆゑはいかに、彼の佛の國土には、三惡趣なし、舍利弗、その佛の國土には、なほ三惡道の名もなし、いかにいはんや、實あらむや、是のもろ／＼の鳥は、皆これ阿彌陀佛の法音をして宣流せしめむと欲して、變化して、作したまへるところなり、舍利弗、かの佛の國土には、微風ふきて、諸の寶行樹および寶羅網を動かして、微妙の音を出だせり、譬ふれば百千種の樂を同時に俱に作すがごとし、是の音を聞く者は、みな自然に念佛、念法、念僧の心を生ず、舍利弗、その佛の國土には、是のとき功德莊嚴を成就せり。極樂のうれしきことよ、七寶の池あり、底に金銀等の沙あり、八功德水は清澄にて、大波なく、天に

是れ五根とは、信根、精進根、念根、定根、惠根にして、五力は根の力を得しもの、七菩提分とは、擇法覺支、精進覺支、輕安覺支、念覺支、行捨覺支、定覺支、喜覺支を云ひ、八聖道分とは、正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定を云ふものなり。

釋尊、始め阿含より終り涅槃に至るまで常に説き玉へる教法にして、此れを極樂の相貌とし鳥の妙音として説かれたものである。然るを西方十萬億土に金色の鳥飛かわし、微風徐ろに來る安樂淨土とし、厭世思想を吹込みつゝある淨土教家は、釋尊の大慈悲を無視するものである。

親鸞は和讃に  
寶林寶樹微妙音、自然清和の伎樂にて、哀婉雅亮すぐれたり、清淨樂を歸命せよ、七寶樹林く

にみつ、光耀たがひにかくやけり、華果枝葉ま  
たおなじ、本願功德聚を歸命せよ。

と賞揚し、觀經の譬を實現し、子孫は重閣高樓に  
安住し、華果繁り、泉流滾々、微風和潤の大庭園を  
構へ、彌陀の淨土を獨占し、都市の中央に、巍々堂  
々庶民を睥睨し、一切衆生の錢財を得、娛樂戲樂意  
のまゝなる生如來こそありがたき次第である。

無量壽經の下卷に世相を説かれてある。

世人愚痴蒙昧にして、自ら智慧を以てして、生  
の從來するところ、死の趣向するところを知らず、  
不仁不順にして、天地に惡逆す、而もその中にお  
いて、希望僥倖して、長生を求めむと欲すれど  
も必ずさきに死に歸すべし、慈心をもて教誨して、  
其れをして善を念はしめ、生死善惡の趣自然に是  
れあることを開示すれども育てこれを信ぜず、ね

り。其の中に展轉して、世々異劫に二期あること  
なし、解脱を得がたし、痛み言ふべからず、人よ  
く中において、一心に意を制し、身を端し、念ひ  
を正しくし、言行あひ副ひ、所作至誠にして、所  
語、語のごとく、心口轉せず、ひとり諸善を作して  
衆惡を爲さずば、身ひとり度脱して、その福德、  
度世上天、泥温の道を獲む。

釋尊の世相を説き、惡を除き善を勸め玉ふ邊は、  
洵に諸經一貫の教示である、此れより前、此經に  
人生の諸相を説き、最後にかく説かれてある。

聖を尊び、善を敬ひ、仁慈ありて博く愛せよ、  
佛語の教誨あへて虧負することなかれ、當に度世  
を求めて、生死衆惡の本を拔斷すべし、當に三途  
無量の憂畏苦痛の道を離るべし、汝らこゝにあ  
て廣く徳本を植えよ、恩を布き施惠して、道禁を

んごろに與に語れども、其の人に益なし、心中閉  
塞してこゝろ開解せず、大命まきに終はらむとし  
て悔懼こもくいたる、豫め善を修めず、窮まり  
に墮みて、方に悔ゆ、これを後に悔とも、はたな  
にぞ及ばむ、天地の間に五道分明なり、依廡窺窺  
浩々茫茫たり、善惡報應して、禍福あひ承く、身み  
づからこれを當く、誰も代はる者なし、數りの自  
然なるをもて、其の所行に應ず、殃咎命を追ひて  
縱捨することを得ることなし、善人は善を行ひて、  
樂より樂に入り、明より明に入る、惡人は惡を行  
ひて苦より苦に入り、冥より冥に入る、誰か自く  
知るものあらむ、ひとり佛のみ知りたまふのみ。  
教誨開示するに、信用する者は少し、生死やせず、  
惡道たえず、かくのごとき世人、つぶさに盡くす  
べきことかたし、ゆへに自然の三塗無量の苦惱あ

犯すことなく、忍辱と精進と一心と智慧とを以て  
すべし、うたゝあひ教化して徳を爲し、善を立て  
よ、正心正意にして、齋戒清淨なること、一日  
一夜すれば、無量壽國に在りて、善を爲すこと百  
歳するに勝れたり。

此の教示にみよ、現在此身に於て善を行ふこと、  
一日一夜なれば、無量壽國に於て百歳の善に勝れた  
りとは、釋尊既に無量壽經に於ての教命である、然  
るを法然親鸞の徒、如何に天台真言等に對抗せんと  
て往生悲觀の思想を力説せしぞ、無量壽經に法藏よ  
り彌陀を説き、極樂を説き、總て稱揚せし所以は現  
在の人生を淨化せんとの釋尊の眞意なるを知らず  
ば、無量壽經は一の小説的構想と稱せらるゝに至ら  
む。



# 日蓮主義より見たる無量義經

(第五回)

井村 日 威

以上菩薩の徳行を讃歎せられた御經文に就いて、略釋を試みましたが、此科段に標示した、一所成就の身を歎ずるより、七金剛心位を明すに至るまでの七節は其の節々が重要な意義を説明して居るのである、第一節は菩薩の本體即ち本有の法身を明したのである、第三節は本有の法身を證得したる智慧であり、第三節は其證得の智慧より發し來る作用である、此三は所證の體と能證の用とを擧げたので菩薩の自體を證明したものである、佛陀の法身、報身、應身の三身とは菩薩の此三徳が成滿したものである、故に此は因位の三身である。

第四節の五味の説法と第五節の利他の十徳とは口輪の説法と身輪の化益であつて、此身口の兩益は衆生濟度の方法であるが故に、菩薩の化他の作用を擧げたものである、第七節の四弘六度は菩薩の因位の萬行であり第七節は果位の萬徳であり、斯く各方面より其徳を歎じて來たのは、此菩薩を中心として、此菩薩の中に所有方面の意義を見出し得ると云ふこととて、後段佛陀の歎徳に對應して、菩薩にも斯くの徳ありて、佛陀の徳行と異なるものではないと云ふことを説明したのである、此は法華經の十界互具の意義を佛陀と菩薩とに依つて具體的に説明をしたも

のと解すれば、直に了解し得らるゝ事である、宗教學の方で言へば、神人合一の理想を明したので、凡夫は何時までも凡夫であり、佛陀は何時までも佛陀と云ふ様に別々のものであつてはならぬ、凡夫も悟れば佛陀であると云ふのでなければならぬ、其宗教の様に神様は永久に獨一の神であつて、吾等は遂に神になり得ないと云ふのでは完全の宗教とは言へない、佛陀の教は其點は最も明白に爲つて居つて、佛陀の衆生救済の目的は、「我と等しくして異なること無からしめんと欲す」と云ふが、其本誓願であり、「亦同じく此道を得せしめん」と云ふが其説法の目的である、故に迷へる我等の本性に佛性ありと認め、其佛陀は研けば立派な佛である、佛と爲り得るものであると説くのである、今は菩薩に寄せて其意味を説明したので、現在の哲學杯より、基督教が不

合理であると言はれるのは此點である、佛教殊に法華經は人身觀の妙處を發揮して十界互具一念三千の大法門を明かしたのであるが、今開經たる今經に於ては、其意義を事實的に示したのである、今此を分り易く圖示して、後の佛陀の歎徳と對照して、其内容を等しくすることを認め得易からしめようと思ふ。

- 一、所成就身 性徳法身(法身) 體(證所) 理法
  - 二、能成就身 修徳法身(報身) 用(證能) 人法
  - 三、定慧二徳 福智二巖(應身)
  - 四、五味説法 五輪説法 教法
  - 五、利他十徳 身輪化益 行法
  - 六、四弘六度 因位萬行 行法
  - 七、金剛心位 果位萬徳 果法
- 此理法、人法、教法、行法、果法の五は、一切萬有を結束すると此五法に外ならぬ、如何なるもので

も此五法の中に含畜する、天台大師は教、理、智、斷、行、位、因、果の八法と結びれた事もあるが、法華經方便品には教行人理の四法に就て開會も論ぜられ、壽量品には教理行果の四法に就て顯本を論ぜられた、此二の中で教理行の三は双方にあるから、此三に迹門の入法と本門の果法とを加へると前記の五法と爲る、天台大師の八法は此五法を開いて八法と爲したのであるから茲には五法を擧げて云したのである、要するに菩薩には凡ての方面の德行を具足して居ると云ふことを示したのである、但し未だ完全に此諸徳を表現して居らぬから、追つて顯はすと云ふので、最後に「不久得成」と云ふたのである。此經の文は菩薩に對して其德行を擧げてあるが、此はやがて、我々共の様な凡愚のもつても此菩薩と同様な徳行ありと云ふことか言顯はされるものであ

る、此無量義經丈で見ても唯菩薩丈の德行であるが、法華經に來つて方便品に佛陀が、諸法實相の法門を説いて、一切衆生は皆佛性を具ふるが故に一佛乘を以て教化し一乘に入らしむることを説かれて、茲に十界皆成佛道の法門が顯説せられた、これから振歸つて無量義經を見ると、今經に説く菩薩の徳とは、一切衆生本具の德行を讚歎せらるゝことに爲るのである。

### 廣 告

年賀狀の贈答は一月一日發行の統一誌上に賀詞を掲載し、相互の省略を期し度、凡て本年の例に依り候條、希望者は左記へ申込まれたし。  
東京市品川町妙蓮寺内  
年賀狀廢止 期 成 會



### 少年少女欄

## 童話 ま、母と小鳥

古 田 昂 生

「さむい〜冬が來ました。  
山はまっ白に雪に包まれてゐます。  
霜が土手にも橋にも、いつぱひ下りてゐます。  
雀もさむそうに「チユ〜」と一聲ないたがり、向うへとんで行つてしまひました。  
小川には冷たい氷りつきそうな水がチヨロ〜と流れてゐます。」

「あや」

「みなさん、ごらんなさい」

あそこに、あの小さい川の中に子供が二人はゐつ

少年 欄 まゝ母と小鳥

てゐるのがみえるでせう。

「ほら、こちらを向いた」

なんと云ふ可愛らしい顔をした子だらうネ。

あの男の子の方が見えて、もう一人は妹です。

この寒いのに、なぜ、氷つくやうな水の中にはい

つてゐるのでせう。

「みなさん、あの可愛らしい兄妹の足もとに青いは

つばがみえるでせう」

あれは大根を洗つてゐるのです。

さむさに、まつさをな顔をして、冷たい水で、手を



まづかにして洗つてゐるでせう。

「あの子たちは、この小川の少し行つた、あの、ほら、あそここの家の子ですよ」

この兄妹はあの家の子ですの。

この兄妹のお母アさんは、ずーと昔に、死してしまつたの。

「お父さんですか？」

あの可哀いそうに、そのたつた一人のお父さんも、去年の春に死んぢまつたの。

あとには只だ、まゝ母が一人残つてゐるだけです

兄弟の家は、たいへんなお金持だけれども、そのまゝお母アさんが、たいへん、ぢやけん人なので

す。

「えゝゝ鬼のやうな人ですとも」

どうしたものか、このまゝお母アさんは、たいそ

う、この兄妹が憎くつて、憎くて、たまらないの。

たへず、ぶつたり、つねつたりするばかりでなく、ある晩なんか、一晚中家の門に兄妹を立たして、寝させなかつたこともあるの。

ごはんも、しつかりたべさせないで、朝から晩まで、この可愛らしい兄妹を叱つてばかり居るの。

兄さんは今年十一よ。

妹は九ツなの。

二人ともたいへん仲よして、喧嘩なんか、一度だつてしたことはありません。

お父さんも、ほんとお母アさんも死んぢまつてからは、このまゝお母アさんに一生懸命孝行をつくしてゐるのです。

けれ共、まゝお母アさんは、朝早くから仕事をいろ／＼云ひつけて、少しでも休んでゐると

二人はいつもまゝお母アさんの見えないところで、抱き合つて泣いてゐるのでした。

このかわいそうな兄妹の家へ、さむい、さむい冬が来たのです。

けさも早くから起されて、あさのお汁に入れる大根の葉っぱを洗はされてゐるのでした。

兄妹の家はお金が澤山あるから雇人を何人も雇つて、それにいろんな仕事をい／＼つけばいいのです。が、まゝお母アさんは、そんなことは致しません。どんなに寒からうが、どんなに暑からうが容赦なく二人を追ひまくりました。

二人がどんなに「ハイ、ハイ」と云ひつけを聞いても、このぢやけんまゝお母アさんは腹がたつて仕方がありませんでした。

たい、憎くて、憎くて仕方がありませんでした。おしまひには、この兄妹の顔を見てゐるのも腹が立つて仕方がありません。

「何んと云ふ、この子たちは怠けものだらう。さア早くおやりつたら」

とガミ／＼と叱るの、

もしも泣いたりすると

「まア、この泣き虫は、やかましい、さア、おだまり、ムツツとおだまり、まだ、だまらぬの、これでもか」

と、大きな指で兩頬をキリツとつめつたりするんです。

兄妹はいつも、すなをに

「ハイ、ハイ」

と云ひ付けを守つてゐました。

そうして、決して、お母アさんの云ひつけに、そむいたりするやうなことはありませんでした。

けれ共まゝお母アさんは、あれやこれやと叱りつけました。

ある日、この兄妹がお母アさんの云ひ付けて倉の中に入りました。

二人とも倉の中で一生懸命、お母アさんの云ひつけのものを探してゐると、「ピシヤン」と倉の戸がしまる音がしました。

「おや！」

と思つてゐると「ガチャーン」と錠の下りる音がしました。

「まア 兄さん、お母アさんが錠を下ろしてしまつた」

「え、ッ、錠を！」

兄妹は扉のところへ来て、押しても、突いても丈夫な錠の下りた扉はあかう筈はありませんでした。

「お母アさん、どうか開けて下さる」

「お母アさん、お母アさん」

兄妹は聲を限り呼びましたが、まゝお母アさんは

あくる朝、

このまゝお母アさんは、倉の焼あとへ来ました。

みんな灰になつてゐました。

そして、まだ、ぶし／＼と煙を出してゐるところ

さへありました。

すると、丁度まんなかどところに兄妹が重り合つて

死んでゐました。

まゝお母アさんは、こわごわ、そつとそばによる

と、ツーと鳥が飛び上りました。

「オヤ！」

と思つてみてゐると、またその鳥は下りて来ました。

それは二羽の名も知れない、きれいな小鳥でした。

一羽は兄さんの方の 屍の上で悲しそうにないて

ゐました。

もう一羽は妹の方の屍の上で、たいそう悲しうにないてました。

屍の前に立つたまゝ、明けやうとはしませんでした。そのうちに、まゝお母アさんのニコ／＼と見てゐた顔が、だん／＼眉が立ち目が釣り上つて、ひきつるやうに見える何か、心に考へて納屋の方へゆきました。

「おや、この煙は？」

「あゝ……倉が火事です。」

お倉が燃えてゐます。まつかな火はお倉をすつかり包んでゐます。

中から兄妹が助けを呼んでゐる聲が聞えてきます。

「助けて——」

「アレ——」

聲をかぎりに呼んでゐます。

まゝお母アさんは、なぜか、遠くからこれを見てゐて、助けやうとしません。

それからあとは、云ふのも悲しい位です。

「オヤ！」

と、まゝお母アさんがその傍によると、また鳥はツ

ーと飛び上りました。

そうして、こんどは悲しい聲で一なき「チャツ」

と云ふと、そのまゝ向ふの森へツーと飛んでいつて

しまひました。

まゝお母アさんは、じつとその鳥の行く方を見て

ゐました。

が、急に顔色がサツとかわりました。

そうして、あわてゝ、家の中へかけ込みました。

その晩、そのまゝお母アさんは自分から、のどを

突いて死んでしまひました。

そうして、その兄妹の家はそれから誰もすまふも

のがなくさびしくガランと立つてゐましたが、先

達の一羽の鳥だけは毎日庭へ来て泣き乍ら、遊んで

ゐます。

——をはり——

雜報

立正大師賜諡記事

日蓮宗管長河合日辰日蓮正宗管長阿部日正顯本法華宗管長本多日生本門宗管長潮島日濟本門法華管長尾崎日暲法華宗管長津田日彰本妙法華宗管長清瀬日守日蓮宗不受不施派管長釋日解日蓮宗不受不施講門派管長事務取扱佐藤日柱の各管長並に日蓮聖人崇敬者として伯爵東郷平八郎子爵加藤高明床次竹二郎犬養毅井口省吾大迫尙道小管原長生田中巴之助佐藤鐵太郎木内重四郎矢野茂の諸氏連署を以て日蓮聖人が内には佛教教義の正統を發揮して法華一實の正法を宣布し外には我國文化の體系を考察して神儒佛三道の融合を鮮明にし三道各々の特色を尊重すると俱に相互の冥合を期し一天四海皆歸妙法の抱負を懐き之が爲に立正安國の主張を高潮せられたる、其人格の高

風と主張の意義とは國民教化の上に寄與すること甚大にして其法勳を表彰せらるゝあらば國民全般警醒の上に多大の効果あるべきを信ずとの理由の下に大師降臨賜願書を本年九月十一日附文部大臣を經由して宮内大臣に捧呈中の處十月十日請願の趣聞届けられ同月十三日特旨を以て大師號宣下すべきに付參省すべき旨通達せられたり

仍而十月十三日午前十時日蓮宗管長磯野日筵日蓮正宗管長阿部日正顯本法華宗管長本多日生本門法華宗管長尾崎日暲本門宗管長代理井上日光法華宗管長代理荒川日治本妙法華宗管長代理蓮池順良日蓮宗不受不施派管長代理鷲日輝の八師は自働車に分乘して參内、宮内大臣牧野伸顯氏より「諡立正大師」の宣下書并に添狀を拜受し退下、更に各管長代表として本多日生師は宮内大臣より宣下の聖旨に關しての謹話を承り且つ種々懇談の後一同退出、是に東京築地水交社に之を奉安し十一時三十分奉戴略式を奉行し、磯野日蓮宗管長發聲、壽量品偈、唱題、言上、本多顯本法華宗管長は奉戴文奉讀、了て各管長及管長代理の燒香あり、次に加藤高明子大迫尙道氏の祝辭、

阿部日蓮正宗管長の挨拶ありて徹式、次で大食堂に於て簡素なる祝宴を開き、食卓に於て、田中智學佐藤鐵太郎本多日生三氏の感話あり、午後一時滞りなく奉戴略式を終り一同歡呼の裡に退散したり、奉戴正式は十一月六日午前十時より上野公園東京自治會館に舉行する豫定にて各教團委員は直に其準備に着手したり、奉戴當日の状況は都下各新聞一齊に或は寫真に或は記事に其狀況を報道したり

勢猛烈として戈に動き空前の盛況に隨て始めて人類究竟の平和を念ふに至る其聲急迫湯者の飲を尋ね貧者の實を求むるに似たり世道一巨人類覺醒の機微と竹葉を隔つ吾八教一字の皇澤慶暉養正の神諭は久く既に此時を俟ち吾究竟平和の至法圓淨統一の名教は久く既に此機を窺ふ法化之を願し國命之を期す時國契合し機微相應す斯道豈斷然興起せざらんや夫れ 明治大帝承て以て 天祖神勅の「就治」を明に寸幅かも大聖佛陀の曾て法を付して「善治」と號するに符す 今上天皇繼て以て 國運聖詔の「養正」を大にす的しく本化大聖の曾て佛囑を擲て立正と呼びたるに合す用の妙之を治と謂ひ體の妙之を正と謂ふ正なる養正即ち是れ世世の冥契其機を一にし時に應じて實を證し實に證て名を證する所以なり嗚呼文應立正の妙名今移して天子の聲より出づ 數賜の機微其義至れる哉滅後六百四十年大正の聖代に於て忽に此盛儀に遭ふ是れ日本國家が初めて塔中別付の法華經を公認せる最初の接觸なり契ふべくして而して契ひ與るべくして而して與る能く開國進取の運に乗じて圓淨同歸の名教を提揚すべきの時方に至る是豈四悉の妙化大に對かんとして先づ世界悉禮の感應せるもの非ずや其れ次て來るべきは社會問題に對する入眼解決なり其功要突て本化の攝理に存す是れ爲人悉禮の應化なり今や世界を擧て思想の紛糾に懷む夫れ克く之を良斷して轉邪歸正の的準を與ふべきものは獨り法華圓觀の勝能なり是れ對治悉禮の當きに發動すべき所而して遂に能く四海一法に入り萬法一理に歸し人類各々其所を得萬業各々其妙を證して接契即安光の實現を見る即ち是れ第一義悉禮妙益の大成なり感應は因縁によりて次第すと雖妙義初めより宛然として四足十回益内に融して機縁時を逃ふ先づ端を世界悉禮の感應に啓て

大師號宣下欽戴疏

維れ大正十一年十月十三日 朝廷吾祖に立正大師の 勅號を追諡したまひ乃ち其 教書を賜ふ吾等此 聖旨に感服して茲に恭く欽戴の 典を行ふ

應て惟よに至眞は元名なし但物に應して稱を立て以て其用を視す名分の隘乃ち斯に起る本化大聖一ひ運末に臨應して熾に別顯の教化を振ふ三大秘法其旨遠く五綱教判其義大なり而して其化益の終窮は正しく圓淨統一普歸妙法立正安國此土安光の實現に在り其規模の雄大固より尋常宗教者流の初りに規ひ知る所に非ず大聲徑耳に聞く機縁又熟を待つ輪轉七百年唯篤く其深義を發顯して以て時に備ふ于茲 明治大帝屹として中興開國の洪運を啓き 皇祖の天業を恢弘し維新の雄圖を大成して四海一家の洗滌を極ぶ 今上の代に迄て世界の大

新に於ける大機動を促すもの歟今此最大好縁を序として次第廣宣化益齎ることなく能く福道を光開し皇猷を翼賛して速に法園冥合の本時に達せんことを期す專に優渥の天恩を欽銘し至誠報國の眞衷を表明して佛祖顯臨人天歡喜の下に恭く 勳焉を拜戴し奉ると云ふ  
大正十一年十月十三日

立正大師門下各教團管長代表

大僧正 本多 日生 敬白

又各教團管長は今回の詮議宣下に際し聖旨のある處を畏み各門下に對し其奮ふ處を示さんが爲に同文を以て卷頭所載の如き訓示を其宗内に發布したり。

尙今回宣下の大師院に就ては門下各教團管長代表として磯野日蓮宗管長本多顯本法華宗管長より内奏したる撰號解説を御嘉納あらせられ立正大師の詮議を御裁可相成りし由拜聞す左に撰號内奏の全文を録す

立正大師

日蓮聖人學生の主張は立正安國の大義に存す遺著に立正安國論と題するあり其大意は正法を興立して國家の泰平を期し殊に國體を尊崇し勤王の大義を力説す日蓮聖人百ふあり「我日本は、國存続の内月氏攘土にも勝れ八萬の國にも超へたる國ぞかし」三五三頁と又百ふあり「隱岐の法皇は天子なり權の太夫は民ぞかし」四七頁と又百ふあり「源平二家と申して王の門守の犬」正候「四頁」と其志の存する所知るべし故に遺著四百六十有編に總釋して之を立正

各地教信

▲九月京都活動史

△二日於本山大方丈護正會九月例會「涅槃經釋」萩原本山部長「日蓮上人御傳統一節」宇都宮弘道君△三日日蓮日健兒會例會「日蓮に變更せし意義」土持副會長「金の斧」山田主事熱心は成功の基「其一」有田會長△八日於川東本寺正二樂會例會「法華題目抄釋」金光孝碩師「心迷醒悟」萩原本山部長△十日（日曜日）健兒會例會「王權と三人王女」中村恒次君「山蓮中納言」豐田主事△十七日（日曜日）「小齋の失敗」山田主事「文字の誤り」高岡主事熱心は成功の基「其二」有田會長△十八日夜於本山講堂管長祝下の御親講「開會の辭」金光孝碩師「經書要文講義」本多管長祝下「閉會の辭」有田安道師 七、八の兩月間休會せし統一團も此に祝下を迎へ大旱の雲霓を待つ感にて涼風をよ吹く此日開會す、これより先苦等幹部一同は千數百の案内狀に數百の辻びらを張り大車輪の活動を開始す祝下には特に京都稅務署招聘に應ぜられ午後四時署員一同に對し御講演八時より本山にて御親講來會者四百五十名。△廿一日後學會初日法要嚴修後講演（本山）「現代の信仰狀態に就て」金光孝碩師△廿四日於本山後學中日法要後講演「日蓮主義の身心圖説」萩原本山部長△同日（日曜日）健兒會「左手の勇士」中村恒次君「最後の勝利」光岡徹君「救の徳」土持良道師 △廿七日於本山後學會結日法要修行後講演「人生は奮闘の舞臺」有田安道師 △廿七日郡山常光寺に於て後學會修行後講演「力ある信仰」豐田通泰師「精神修養と

安國論と云ふも可なり又遺著中「立正觀鈔」と題するあり其大意は信仰と智識との合一を説き最高の智慧と最善の信仰とを究竟合一したる處に宗旨の生命を立つ此正觀鈔は即ち是れ立正安國の大本なり此義を以て觀れば遺著全部總釋して立正觀鈔と云ふも亦可なり而して本據たる法華經には「若し諸國經書治世語言養生樂等皆順正法」の文あり是世法佛法合一の義を示すなり  
又大師院に關しては遺著中に左の文あり「去ぬる文永五年後の正月十八日西戎大蒙古國より日本國を襲ふべきの由狀を渡す日蓮が去ぬる文應元年に點へたりし立正安國論少しも違はず符合しぬ此書は白樂天の樂府にも越へ佛の未來記にも劣らず未代の不思議何事か之に過ぎん賢王聖主の御世ならば日本第一の權狀にも行はれ現身に大師院もあるへし」三五三頁「王法佛法に冥し佛法王法に合して王臣一同」本門の三大秘密の法を持ちて有徳王覺徳比丘の其乃往を未法濁惡の未來に移さん時 教宣並に御教書を申し下して靈山淨土に似たりん最勝の地を尋ねて戒壇を建立すべきものか時を待つべきのみ」四三〇頁と  
以上の理由に依り立正大師の稱號を適當なりと信す



▲大阪堂閻寺教報

△七月十二日同寺「現代思想の鉄陥」京藤義應「冥途退治と法華經」上田布教師 △七月廿五日學生右教團「日蓮上人の御一生」鶴澤泰温君「常時進」中野信良君「日蓮主義の統一」藤啓純君「宗教覺醒者親鸞と日蓮」星野純義君「實生活と信仰」栗原顯有師△八月廿二日「信仰の要義」三谷會善師△九月十二日「進むべき道」京藤義應師△九月廿四日「生活の第一義」三谷會善師

▲備前和氣布教史

△原田日勇師講師として△九月三日「常磐町日待本尊の内容」△五月中の町神原宅「神佛の意義」△八日片山増次郎宅「勸請に就て」△十日橋本町日待「宗義の立脚地」△十五日婦人會「祭典の意義」△十六日同信會方便品講（續）△廿一日正午鹽田村役場にて青年團辨論練習會「文化生活に就て」△廿一日夜後學初日「彼岸に就て」△廿四日夜學中日「再生の説」△廿七日後學結日「寒苦鳥」△廿八日天瀬村修養會「生活の安定」原田日勇

▲廣島通信

△願本婦人會 九月十三日午後三時本願寺に開盛島日の開師の講話ありたり。△彼岸説教 秋季彼岸七日間妙藏寺にて毎夜能仁一十師説教本願寺も二十一日より二十四日迄説教能仁一十師島田日開師出講二十七日午後四時長遠寺彼岸説教能仁一十師出講なした

▲豊橋教報

○九月十二日龍の口御法難會を誓む參詣者は檀信徒外統一團員少年會員等滿堂立錫の余地なく 午後七時半莊嚴なる法要を誓み次で少年會主任大竹直治君のお話は少年少女はヤンヤと計

り拍手す 彌々當日の講師國友正は常樂院日經上人の題にて色談法華の行者なることを擬換説痛く感動を興へ加藤將軍は龍の口御法華の實感を述べて門下の覺醒を促した九月教壇の獅子吼は九日服部家後摩連日、煙草專賣支局何れも松本師、立正會は加藤將軍大竹氏出演

▲第三教區の活動 △九月廿九日市原郡内田村本傳寺に於て臨時例會を開き大講演會を開催「久遠の生命」長岡管事「是好良機」海老澤團長「法華の利益」高田布教師△十月四日山武郡片貝村小幡妙覺寺に於て武田文學士の講演と河野見中師の初説教ありて後夜に入りて日蓮聖人の御一代記幻燈布教を開始し多大の感動を興へたり△十月五日東金町北の幸谷妙徳寺に於て武田社會部長の御書講義あり後夜は幻燈布教を開始した△十月八日長生郡二宮本村本源寺に例會を開き翌九日茂原町市場に於て秋葉、海老澤兩師の道路布教があつた。開催「信仰の復活を望む」高貫布教師

▲千葉布教通信 △八月十九日午前十時印旛郡佐倉町妙經寺にて開催「信仰の復活を望む」高貫布教師  
△千葉郡白井村中野本城寺に 八月廿九日監督布教師木村日保師を延て大講演を開く、「日蓮主義と國民思想」木村監督布教師  
△八月三十日印旛郡上村小谷流永福寺に開催「精神生活」高貫布教師 吾教徒は如何に信解すべきか「木村監督布教師△同三十一日山武郡深村本極寺にて開催、「佛敎と世の中」高貫布教師「信仰の要諦」木村監督布教師△九月九日午後一時山武郡丘山村東成寺にて開催、「信心正因」高貫布教師△同月十七日夜同所に於て「信行要義」高貫布教師△十月二日夜、東金町妙經寺にて高貫布教師△十月六日夜山武郡

### ▲山根師山陰巡教

監督布教師大野正山根日東師の一行は左の日次によりて山陰巡教を實施せられたり、△十一月九日午後二時 □京都府相樂郡相樂村相樂小學校庭女會、將來の日本婦人「文學士武田顯龍△同日午後七時木津町妙樂寺□「生活安定の根本基調」武田文學士「調於人華」山根監督布教師△九月十日午後二時岡部大樂寺「五果に就て」武田文學士「警世の梵音」山根監督布教師△同十一日午後七時綾部了圓寺「我國將來の宗教」有田宏道「先づ我を觀視して」武田文學士「統一教概観」山根監督布教師△同十二日午後二時舞鶴町「妙宗青年會主催」國家と宗教「有田宏道」宗教の五綱に就て「武田文學士」菩薩行「山根監督布教師△同日午後七時新舞鶴工友俱樂部「修養の根本義」有田宏道「現代の日本と國民の覺悟」武田文學士「生活の淨化」山根監督布教師△同十四日午後二時鳥取縣青谷町青谷小學校（統一團支部主催）文化生活と宗教「武田文學士」修養の根本義「山根監督布教師△同日午後七時松崎本立寺「日蓮聖人の主張」武田文學士「道法の尊重」山根監督布教師△同十五日午前十時 東郷村市橋家庭講演「源遠ければ流長し」武田文學士「本化の家庭」山根監督布教師△同日午後二時東郷小學校「先づ足を大地へ」武田文學士「修養に就て」山根監督布教師△十六日午後二時 鳥取法泉寺「地明會主催」六度に就て「武田文學士」此子可憐「山根監督布教師△同日午後七時鳥取市瓦町管能寺（八品派）本化聖教團主催「懺悔の生活」武田文學士「日蓮主義運命觀」山根監督布教師  
△同十七日午後二時倉吉町成徳學校「現代の日本と國民の覺悟」武田文學士「光明裡の生活」山根監督布教師△同十八日午後七時松江市商業會議所「日蓮聖人の主張」文學士武田顯龍「修養と信仰」山根監督布教師△同十九日午後七時同寺町常教寺（日宗）本化聖教會主催「日蓮聖人の主張」武田文學士「修養と信仰」山根監督布教師

丘山村東成寺にて「祖書要文講義」高貫布教師  
▲北陸布教通信 △九月廿一日、社村南居妙正寺後摩會説教、兒玉常宣師同廿四日夜説教同師△同廿六日武生町小學校に於て、日蓮主義者の實際生活、兒玉常宣師、五百名△同日七日妙正寺説教十月十日當夜題目堂、説教兒玉常宣師、△同十二日妙正寺會式通夜説教寺島常宣師桑村常信兒玉常宣師墨田玄師同十二日正午法要午説教參詣者三百名同十五日同寺佛敎研究會例會講師兒玉常宣師△同十六日福井市於飛山岸太郎氏宅、宗教の要諦兒玉常宣師五十名

▲統一團名古屋支部 □九月廿五、六の兩夜名古屋常徳寺にて支部主催本多日生觀下の「聖訓講義」聽衆堂に溢る△廿七日名古屋新道小學校社會敎化講演會に於て本多日生觀下の講演があつた外活動寫眞を映寫した聽衆二千餘名  
▲統一團神戸支部 □九月二十日零時半より 三菱内機機「對國民の希望」△同日三時半より 三菱造船所（の組）對國民の希望△二十一日三時半より 同上「釋迦傳の一斑（後編）」△同日夜 明石公會堂「人生と佛敎」△二十二日零時半より 三菱電機「國民自覺の内容」△同日夜 神戸淡東俱樂部「日蓮主義綱要」△十月十八日〇時半より 三菱内機機「立正大師説教に就て」△同日三時半より 三菱造船所「立正大師説教に就て」△十九日〇時半より 三菱電機製作所「立正大師説教に就て」△同日三時半より 三菱造船所「歴史の感化」△二十日三時半より 神戸製絲所社員「立正大師説教に就て」△同日七時半より 淡東俱樂部にて「立正大師説教に就て」以上本多觀下の講演ありたり。

▲名古屋自慶會  
△九月廿四日、豐田本社、予の希望本多日生觀下、社員及部長五十名△同廿五日、小松組製絲、釋迦傳の大要本多日生觀下、六百名△廿六日、菊井工場、女子の修養、本多日生觀下、二百名△同廿五日、日本車輛、國民自覺の内容、本多日生觀下、七百名  
▲立正結社の組織  
本多觀本法華宗管長は、立正大師説の道義を紀念すべく、宗内僧侶に對し、立正結社の組織を命ぜり、その規約左の如し。  
立正結社規約  
第一章 目的  
第一條 本結社は立正大師の證號宣下を記念し追賜の聖旨を奉載し日蓮聖人即ち立正大師の遺教を發揚して立正安國の祖國に寄與し衆生濟度の佛意に契合せんが爲に顯本法華宗の僧俗全部の一大結合を形成し異體同心の活動を爲すを目的とす  
第二條 前條の目的を達する爲に布教興學を旺盛にし時代適應の施設を爲す  
第二章 名稱  
第三條 本結社は立正結社と稱す  
第三章 事務所

第四條 本結社の事務所は其本部を東京に支部を適當の地に置き又支部の下に分會を設く  
 第五條 本結社の本部は立正結社本部と稱し支部は立正結社の下に地名を付し分會は會名又は寺名を付す

第六條 本結社員は全部本部の社員名簿は本部社員名簿各支部社員名簿に分て嚴重に保存す支部及び分會には支部及び分會限りの社員名簿を常備し且つ社員の異動は毎年一回必ず本部へ報告するものとす

第四章 社員

第七條 本結社に入社せんとする者は申込書に住所氏名を明記し本部又は支部に申込むへし住居其他に異動を生したるときは申込所へ通知すへきものとす但し社員は各自門戸に社員章を貼付すへし  
 第八條 本結社員は毎月一口金拾圓の義納を爲すを要す一時金貳拾圓以上納附の者は毎月の義納を要せず但し一人にて數口申込むも差支なし  
 第九條 本結社を退社せんと欲する者は其事由を詳記し本部又は支部及び分會の承認を求むへし

第五章 經費

第十條 本結社の經費は社員の義納金及び特志者の寄附金を以て支辨す  
 第十一條 社員の義納金は其半額を各地支部又は分

會の經費に宛て其半額を本部の經費に充つ特志者の寄附金は納付者の指定に依り處理し指定無きものは本部に納付せられたるものとす

第六章 役員

第十二條 本結社本部に總裁一名、理事若干名、評議員若干名を置く  
 第十三條 總裁は本結社の事務を總轄し理事は一切の事務を處理し評議員は重要事項に參與す  
 第十四條 總裁には顯本法華宗管長を推戴し理事は評議員に於て選出し評議員は社員中より總裁之を囑托す

理事及評議員の任期は三箇年とす

第十五條 本結社各支部及び分會に支部長及び分會長各壹名、幹事若干名を置く

第十六條 支部長又は分會長は支部又は分會の事務を總轄し幹事は支部又は分會一切の事務を處理す

第十七條 支部長又は分會長は總裁之を任命し支部又は分會の幹事は支部長又は分會長之を囑托す

第十八條 毎年一回本部に於て社員の總會を開く但し臨時總會を開くことあるへし

第十九條 本規約の改正は本部評議員會の議決を経るを要す

第二十條 創立の際に於ける理事は總裁之を囑托す

大僧正本多日生師講述

法華經要文講義

法華經要文講義

大智度論卷之五

の大恩を感謝して居るのであります。

それはどういふ點が大恩かといへば、世間に無いところの希有の教を以て——世間の教は皮相の事から論を立て、居るけれども、釋尊は宇宙の眞理に就てもその奥を究め、我等の心に就てもその眞實を究めて、一切の他のものと異つたところの眞實の教を以て我等を憐愍して教化して下さる、その我等を救ひ下さるといふ事は似て居るやうであるけれども、それは恰も眞鍮と黄金の違ふが如く、釋尊の教は實に眞實の法であるから、それを「希有の事」と申したのであります。左様な最高完全な教を與へて、さうして我等を利益なさつて、殊に法華經に來つてはすべての眞實を領解し得た、この御恩は幾億萬劫を経たからといつて、これを報ひつくすといふ事は出來ない譯であるけれども、先づ力の及ぶ限りに於て

佛恩を感謝しなければならぬと申ししたのであります。

この經文の所に、章安大師が釋尊の十大恩といふものを説かれて居ります。その中に殊に注意すべきは「隨逐化の恩」でありまして、丁度母親が子供の後ろに隨きしたががつて居つて、椽側に行けば落ちた後ろに隨きしたががつて居つて、椽側に行けば落ちた危いと思ひ、火鉢の傍に行けば手を焼いてはいけなふと思つて、絶えず心配して居る、子供は勝手氣儘にブラ／＼遊び戯れて居るけれども、親は少しも眼を離さないで之を保護して居るやうな有様で、我等が三界六道に流轉する場合にも、釋迦牟尼佛はその背後からどうぞ彼等が過ちを取らぬやうにと、護つて下されるといふのが、この隨逐化の恩でありまして、それからいまいつは「畢竟化の恩」でありまして畢竟して推究めてしまへば、何人でも釋迦牟尼に依

つて救はれざる者は無い、たゞ縁の浅い、薄いに依つて時間の問題は残るか知らんけれども、結局はみな釋迦牟尼佛の大慈悲の手に依つて救はれるのであるから、その事を考へたならば釋尊の感恩を感謝せざるを得ぬといふのであります。左様な事が十箇條ならべて釋尊の十大恩といふものが説かれて居る。これは非常に大事なこと、後に壽量品に至つても大事などころの佛恩に感謝する信解として残るのであります。

日蓮聖人の信仰にあらはれたのもやはりそれでありませす、開目鈔にすなはち「一切衆生の尊敬すべきもの三つあり、所謂主師親これなり」と言はれた、あの大神神から開目鈔上下二卷の大文章があらはれて居る、それは恰度この「世尊大恩」の意味であります。又大涅槃經などに、多くの佛弟子が集つて來て

も、みな釋尊に對する感謝の言葉述べたのでありまして、殊にその最後の大迦葉菩薩の感謝の偈といふものが有名な事になつて居りますが、日蓮聖人はそれを非常に愛讀せられて、御遺文の中にはその經文が時々あらはれて來るやうな譯であります。

それ故に、昔の研究に於ては、この述門の方便品の開顯の教義といふやうなものは、何か面倒な冷かなことのみ考へて居りますけれども、法華經の經文の趣意は決してさうではない。この譬諭品信解品を説いて、又次に藥草論品に至つて、どういふ事が多く表にあらはれて居るかといへば、それは眞理の側もあるけれども、佛の慈悲が衆生を濟度せんとして燃えて居る有様が、頗るよく説かれて居るのであります。これは將來法華經を研究する者が一層注意すべき點であると思ひます。

### 藥草論品 第五

この品は前の信解品に於て中根の人達が信解を申述べたに對して、釋迦如來がそれを達成せられたのであります。達成といふはその意味合を更に引き伸べて、さうして證明を與へられるので、汝等が信解品に於て領解した意味は間違ひが無い、その意味合は斯ういふ心持であつたであらうといふ事を述べられるのであります。それを又譬諭に寄せて説かれて居るのであります。信解品は長者窮子の譬諭に寄せて説いたのであるが、今は一雨三草の譬諭と申し、天より降る一つの雨が總ての草木を成長せしむるが如く、その成長する草木には大小があるけれども、雨は平等に降るのである、斯くて平等と差別の關係を最も能く説かれて居るのであります。上から

降る雨が平等であり、下の土が平等であるが、併し其處に生える種の性質に依つて草木の大小が別れて來るのである、下の地といふは佛性共通の點であり、上の雨といふは釋尊の慈悲より出でたる説法教化である。教の方は平等に與へられ、衆生の佛性は平等であるけれども、而もその得益に於いては差別があることを説かれたので、やはり現在の人生もその通りであります。如何に人格が平等であり制度が平等であつても、そこにその人々の動情に依り、又その人々の賢不肖に依つて、種々なる差別相を生じて來る譯であります。到底實際の人生をして何事も平等の状態に置くといふことは出來得ない、その差別と平等の關係を教へられたお經として有名なのであります。今は唯その大體を紹介するに過ぎないのであります。



### 三九、善い哉善い哉迦葉よ、善く如來の眞實の功徳を説く、誠に所言の如し。

この所は釋迦牟尼佛が信解品の領解に對してそれを賞揚せられた言葉で、その言葉が「如來の眞實の功徳を説く」といふことである。信解品にはいろいろ醫論は長いことであつた、又その教の所謂小乘、權大乘、實大乘といふやうな關係であるけれども、さういふやうな教相の相違を教へるよりも、何よりも如來が信解品に對して述成せられた主眼は、汝等よく如來の眞實の功徳を説明し得た、長者がああ慈愛を以て子供を救ひ上げる所に如來の功徳を説いて居る、さういふ意味に信解品を解せられたことが洵にこの品の觀察點として大事なことであります。從來は信解品などを解釋するにしても、唯教相の相違、

佛敎の經典の優劣にのみ重きを置いて、信解品の全體を一括すれば釋尊の功徳を説いたものだといふやうな風には觀て居なかつたやうであります。天台すでに然りてあります、又信解品に對して日蓮聖人がさういふ意味に解釋をせられたことも見ないのであります、經文の順序に由つて見て行くと、茲に擧げたやうに明かに信解品全體は、その要點を採れば「如來の眞實の功徳」を説いたのである、さうしてその説き方は間違ひないといふことを證明せられたものである。

四〇、如來は一切諸法の歸趣する所を觀知し、亦一切衆生の深心の所行を知つて通達無礙なり。

この所は釋迦如來が知見に於て上は宇宙の眞理を

悟り、下は人々の心の奥を見透して、眞理を觀る上に於ても、機根を觀る上に於ても、過ちが無い所の大智慧を有つて居られる、即ち實相の眞理原則を觀る智慧もあれば、人々の機根に應じてそれを教ふべき觀察も過ちをしないといふ意味が説かれて居る。即ち如來の智慧の廣大なることを現して居るのであります、「如來は一切諸法の歸趣する所を觀知して、この宇宙に現れて居る總ての物のその歸着する所、之を押し詰めたならばどういふものであるかといふ哲學的の眞理をよくも悟りになつて居る。さうして「亦一切衆生の深心の所行」と言つて、心の奥より出て、行ふ所の總ての事柄、即ち皮相の觀察でなくして、その人の心の奥まで見透して、さうして少しも過らない「通達無礙」に之を照覽し給ふのである。

四一、我は是れ如來なり、未だ度せざる者は度せしめ、未だ解せざる者は解せしめ、未だ安んぜざる者は安んぜしめ、未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ、今世後世實の如く之を知る、我は是れ一切知者なり、一切見者なり、知道者なり、開道者なり、說道者なり。

この處も如來の偉大なることを現したのであつて、殊にこれは堂々たる宣言であります、「我は是れ如來なり」と釋迦牟尼佛みづから如來といふことを宣言せられた。これは如何にも嚴かなことであつて、如來の義理は種々に解釋されて居りますけれども、先づ要點を言へば眞如實相、妙法そのものよりしてそれが人格となつて我等を教ふ爲に現れ來つて居る

のである。眞如際を盡して衆生濟度の爲に來現せるもの、之を如來といふのである。一面には眞理に契合し、一面には衆生救済の爲に働いて居るのを一言にして「如來なり」と言はれたので、それ故にその如來として人生に來つた以上、その働きは「未だ度せざる者は度せしめ、未だ解せざる者は解せしめ」——これは未だ生死の海を渡らぬ者をして之を渡らしめ、未だ解脱せざる者をして解脱せしむるといふやうな風に、文字の通りに見て行つても意味は判るのでありますけれども、いろ／＼なお經に通じてこの言葉は屢々使はれて居るのであつて、これは四諦觀から説明されて居る。四諦といふのは苦、集、滅、道と稱して、迷へる方の原因結果と、悟りに行く原因結果を説いて居るので、この四つの事に依つて人生を大觀することが出來るといふので、之を四

諦觀と言つて居る。その内容は小乗のやうに解釋することも出來るし、又法華經の意味に解釋することも出來る、内容の淺深はあるけれども、この格は變らないのであります。苦と集は迷うて行く方の原因結果を教へたのであり、滅と道は悟つて行く方の原因結果を教へて居るので、吾々が迷うて來るのは集諦といつて、前の生に種々なる罪業を集め、種々なる惡業を爲して、例へて見れば芥埃を捲き集めるやうに詰らない者を自分の身に引寄せて居るが故に、それが原因となつて茲に生れた場合には苦みの人生が現れて居る譯である。悟つて行く時分には道を修して善を行ふが故に、その結果寂滅涅槃に達することが出來るのである。この四つが非常に深い意味で、一切の佛教はこの四諦の中に約まると天台も解釋して居る譯であります。今釋迦はそれに依つてこの

説明をして居るのである。この「度せざる者」といふのは苦果の依身と申して、この人生に生れて居る、即ち苦みの海に譬へて、人生の苦しい煩悶の中に惑溺して居る、その所からそれを渡つて向ふの岸に行けない者が所謂未だ度せざる者である。人生に處するに如何なる事に出會しても平和を破られんやうに、煩悶を起さないやうに、所謂信仰の力に活きて居る者がこの世を度つた者である、その未だ人生の苦みを度り得ない者をして度らしめる。それから「未だ解せざる者」といふのは過去の原因に依つて人は皆生じ來つたものである、唯だ偶然に人が此世に在ると思ふたり、或は神が造つたとか、或は原因無くして唯だ在る、物質的であるといふやうな愚な事を言つて、自分の本來の面目を解し得ない者に對しては、吾々の生命が無限であつて、久遠よりの生命が

己れの爲した業の力に依つて茲に果報が定つて來て居るのであるといふ所の集諦を領解せしめ、過去の原因を領解せしめる。それから「未だ安んぜざる者」といふのは精神生活に安んぜざることであつて、所謂道諦に至らない、物質の慾望にのみ走つてそれが爲に精神が悶へて居る者が、精神生活に入つて道德的宗教的事を尊いことに思つて、場合に依ればそれが爲には一切を犠牲にしても宜い、道德宗教の事に依つて進み行くなれば、そこに自己の平和満足があるといふ、それが即ち「安んずる」といふ事であります。その宗教の精神生活の眞價を味はない者にそれを味はしめるのが、未だ安んぜざる者は安んぜしめるといふ事である。それから「未だ涅槃せざる者は涅槃を得せしむ」——これは即ち滅諦であつて、涅槃といふ言葉は更にそれが一層強く現れて居

る、涅槃は一切の妄想なり、苦痛なり、迷ひなりの不純なるものが全部除かれて洵に純粹なる淨い精神生活に入つた者である。寧ろ悟りを得たと言つても宜いのでありますが、その悟るといふ意味も、今申すやうな心の穢れが除かれ、苦みが除かれ、さうして何者にも動搖せられない境界、その涅槃を段々に推し究めて行けば佛様まで行くのでありますが、併し先づ現在の生活の中にも、日蓮聖人が彼の頸の座に坐り、或は佐渡ヶ島に居ても非常な満足を感じて一點の動搖を受けない、あの境界は即ち現に涅槃を得て居る次第であります。その繋がりをつつと及ぼして行けば、完全なる佛に成つてしまふ迄すべて涅槃であります。先づこの場合に於て言へば、進んで佛に成るといふことよりは、人々が現在生活の中に何者にも動搖を受けない涅槃の境界、宗教に安

んじて居る、そのモ一つ進んだ最も完全なる宗教安心の境界が涅槃であります。それは悟りともいふ程な譯であります。この四つを併せて考へて見れば、迷ひに對する所の結果として在る人生の苦界を濟度し、その原因を領解せざる者に吾々の生れて來た原因を領解せしめ、さうして善を積み徳を積んで行く所の道德的宗教的精神生活の價値を知らない者にその價値を領解せしめ、如何なる場合に處してもそれに於て動搖をしない所の所謂自慶安住の境界に至らしめる。即ち安んぜざる者をして安んぜしめる、この安んずるといふやうな事は、安心といふ意味もあるけれども、安は不動の義理であつて動搖を受けない事である、そこに精神が満足すると同時に、如何なる出來事に遭つても心が揺るぎ亂されない有様をいふのであります。それがモ一つの清冷になつて、

さうして殆んど佛の大覺に返づく意味合になつて、生活がそこに現れて來たならば、それが涅槃を得た人といふのである、決して消えて行くといふやうな意味ではない、非常な高潔な理想的なる生活を涅槃の生活といふのであります。

そこで左様にして大勢の者を救ひ、さうして自分は「今世後世實の如く之を知る」で、この人世にある所の事柄も、又その人が死んで行く先の事柄も事實に之を知つて居る、それ故に「我は是れ一切知者なり」——「一切知者」といふのはモウあらゆる事柄を能く悟つて居る譯である、即ち前にあつた諸法の實相をも悟り、衆生の心の奥をも悟り、それに教ふる方法をも悟り、總てに於て達せざる所無きが故に之を一切知者といふ。併ながら基督教でいふ全知全能のやうに無から有を生ぜしめるとか、有をして

無に歸せしめるといふやうな、眞理に逆行してもそれが可能であるといふやうな亂暴な意味は有たない、基督教でいふ全知全能ナンといふことには、非常な不道理な意味を含んで居る、それで理性上の説明がつかぬやうになれば「神は別物である、それは全知全能なるが故に……」といふことで逃げやうとするけれども、佛教の方はさういふ弱點を有つて居らない。その一切知者といふことは、眞實に諸法の歸趣する所を知り、又衆生の心の行く所を知り、原因結果の關係を知り、それを導く方法を知るといふ點に於て一切知者である。さうして「一切見者なり」——「見者」といふのは、その事が尙ほ成熟した有様で、モウアツ／＼とその事が掌に執つて見るが如く判る、その事に熟達して殆んど暗んじて居るやうな有様になつて居るのが見者といふのである。即ち

それは佛の悟りを言ひ現して居る言葉であつて、隨つて一切衆生に對しては「一知道者、開道者、說道者」といふ地位に立つものである。これは釋尊の心の徳を言へば道を知れる人であり、それから身を以て救ふ方から言へば道を開く人であり、口を以て救ふ方から言へば道を説く人であるから、釋迦如來の意は道を知り、身は道を聞き、口は道を説くといふので、之を「三輪の妙化」といふのである。三は身口意の三つであつて、輪は天輪聖王の前にある輪寶が總ての惡きものを打碎いて正義を打立てる力であるが如くに、釋迦は身口意に於て總ての邪なるものを碎いて、正しきものを世に現す力があるが故に、之を三輪といふのである。その不思議なる教化をなさるから、一言にしていへば之を釋迦三輪の妙化といふ、三輪または三密ともいふ、これは一切經に通じ

つて、現世安穩にして後に善處に生じ、

道を以て樂を受く。

この處は法華經の利益を顯はすのであつて、同じ佛敎と言つても現世の利益のみに偏したやうなお經も見えるし、又未來觀の一方になつて居るやうなものもあるけれども、元來釋尊の化導は現在と未來とを合せて救ふので、「今世後世實の如く之を知る」と言はれて居るので、唯現在だけを救ふのであればそれは宗敎の第一義を失うて居る譯である。どうしても宗敎は無限の生命に基いて、この生命の前途に保障を與へなければならぬから、現在だけ救ふのでは宗敎といふ事は少し無理かと思ふ位のことである、どうしても魂の問題に入らなければならぬ。魂の問題に入るは宜いが、今度は魂の行末だけ

ての佛敎の術語であります。口輪の説法、身輪の活動、意輪の慈悲といふことになつた、意には絶大の慈悲があり、口には無礙の説法をなし、身は千變萬化して衆生を教化する、約して言へば佛敎にどれ程多くのお經があり、どんな佛の活動があり、何處に現れて働いたにしても、それは釋迦の三輪の妙化に外ならぬ。その眞實を徹底的に説明したものが壽量品の顯本の説となるのでありますが、其處まで行かなくとも能く味はつて見れば、自らこれ等の宣言の中にはその意味が含まれて居る譯である。壽量品の經意を持つて來て斯ういふ經文を解釋すれば、實に絶對の價値を生じて、釋尊の威嚴を説き得る譯であらうと思ひます。

四一、是の諸の衆生、是の法を聞き已

を保障して、現在生活の上に何等救ひを與へぬと言へば、これ亦非常に偏つた宗敎である。苟も釋迦の如き偉人が敎を開いたのに現在だけとか未來だけとかいふやうな、そんな偏つたことは考へるだけ野暮な話である、そんな意味に佛敎を應用したといふことは、能く／＼の考へ違ひであらうと思ふ。どのお經でも心して讀んだならば、釋迦の説く所假に未來を説くやうでも、直ぐその裏には生命の無限から導いて現在生活を善導して居る、又現在の事だけ説き居るやうでも、直ぐ根柢に入つて生命の無限を忘れてはいかぬといふことを説くのであるから、釋迦の一切經は總てが現在未來に亘つての教化であると言はなければならぬ。それを忘れて居る者があるから、法華經はさういふ點を特に注意を與へて、この法を聞き已つた者は、決して死んだ先きとか、現在

だけではない、現世は安穩であり後には善處に生れる、この生れるのも唯善い處に行つて美味しい物を食ふといふやうな、さういふ劣等な快樂ではなくして、道を以て樂みを受けるのである、やはり崇高なる精神生活の樂みを受けて行く譯である。日蓮聖人の安國論に「先づ生前を安んじて更に没後を扶けん」と抑せられたことの如き、これは佛敎の教化を能く言ひ現して居るのである。それは阿含經などの場合にも、その言葉は殆んど遺憾なく説かれて居る、決して佛敎は未來觀的に偏したものではない。元來釋迦は厭世悲觀の人であり、未來的の敎であつたのを、日本の坊さんが日本的の頭て之を現實化したものだから、日蓮聖人に依つてさういふ意味合が鮮かになつたといふやうなと言ふ人があるけれども、それは皆無學の致す所である、佛陀の經典を解せざるが

故に、臆測を以て左様な事を言ふのである。唯だ日本の或る宗派の傾向がさうなつて居つたのを、日蓮が慨歎したといふとはあるけれども、釋迦の敎までが厭世的であつたとか、悲觀的であつたとかいふ風に見るのは、餘程粗末な頭である、釋迦の敎を研究しない者の言ひ草であらうと思ふ。これは極く大事なこととして、將來の宗敎の立場は「現世安穩にして後に善處に生じ」といふこの兩面を含んで、宗敎の效用を發揮して行かなければならぬと思ふ。

四三、如來の說法は一相一味なり、所謂解脫相、離相、滅相なり、究竟して一切種智に至る。

この處は「如來の說法は一相一味」と言つて、天から降つて來る雨が總ての草木を潤すに於て平等て

あるが如くに、如來の說法は唯今も解釋したやうに、表面淺深あるが如く見えても、能く／＼考へれば同じ相、同じ味ひである、相といふのは眼から見ていふから相で、舌から言へば味ひといふことになる。「一相一味」といふは、能く見、能く味へば即ち一相一味である、粗末な見方をするから様々な相に見えたり、ちよつとしか甜らんから味が違つたりするけれども、能く／＼見透し又噛みしめたならば、如來の說法は一相一味にして、開顯統一の圓滿珠の如き佛敎である。それは大觀したなればさうなつて來るのであるが、その譯柄は、畢竟如來の敎に解脫相、離相、滅相といふ、この事に他ならんからである。「解脫相」といふは總ての者をして解脫せしめやうとして法を説いて居るのである、即ち前にあつた「未だ解せざる者をして解せしむるといふその解脫は、

一般的に言へば煩惱を解脫し、罪惡を解脫して行くのである。苦しい事と罪とを解脫せしめやうとして居る、苦悶に在る者をして幸福に導き、罪惡に陥る者をして善を積む人たらしめやうといふその働きてある、佛敎の全部はそれに他ならぬ。それから「離相」といふのは、これ亦その罪惡より離れしめる、それから足を洗はしめるが、遠離相と言つて、それが爲に「斯様な所に近寄るな」斯様な事を爲すな」といふ敎が露山現れて來るのである。どうしても悪い所に近寄り、悪い事に馴染んで行けば、知らず識らず惡化するものである、人は縁に依つて變るのであるから、その縁を撰んで惡縁より遠ざからなければならぬといふ事を説く、それが離相である。それから「滅相」は寂滅相であつて、これは物を無くしてしまふといふ事ではない、前にあつた涅槃の事て

あつて一切の不純なるものを滅してしまへば、輝くべき靈光を有つて居る。人はみな表面に人格の缺點があるのて、腹を立てるとか、或は人を憎むといふことがあるけれども、それは心の皮相の働きてある、眞の心の本體は美しき佛性である、その穢れを滅し、月を蔽へる雲を拂ひ、鏡を蔽へる塵を除けば、即ち靈光が輝くのであるから、その事を教へたのである。左様にして解脱の事を説き、遠離を説き、寂滅を説いて、往いては「究竟して一切種智に至る」て、如何なる者でも如來の大覺に至らしめやうとして説いたものである。「一切種智」といふはどういふ事かという、統一の知識をいふのである、種はたねであつて、一つの物に纏めあげて、それから一切の判断がつく所の知識をいふのである、事柄が違へば又違つた智慧が要るといふのは、本當の悟りて

はない。所謂宇宙の眞理が一元に歸するならば、智慧も磨いて磨き上げれば一元の智に歸する、一以て萬を察し得るものである。發動すれば千萬無量の智慧にして、量るべからざるものであるけれども、本に歸すれば絶対無上唯一の智である、それを一切種智と稱したのである、その根本絶対の唯一の智慧に至らしめやうとして、教を説いたのである。併しそれを受ける者に取つては様々に利益が違つて来る、それは雨が平等に降るけれども、草木はその分に應じて潤ひを受けると同じ譯である。

得せしむ。

この處に於ては、如來の活動がどういふ場合に利益を與へて行つたかといふ事に就て、纏つた意味を説明されたので、「我は爲れ如來兩足の尊なり」——「兩足」といふ事は印度では人間の事をいつて居つたが、斯ういふ場合には智徳兼備といふやうな意味で、智も満足して居るし、徳も満足して居るといふやうな、右も左もみな整うて居るといふ意味で兩足尊というたのである。この完全なる如來が人生に生れて來たのは、丁度大早の時に黒雲が天に覆いたやうなものであり、如來の説法はそれが雨となつて降るやうなものであり、一切衆生は將に枯稿んとし居る田の稻のやうなものである、その一切の枯稿の衆生を充潤し、さうして苦を離れて安穩の樂、世間の樂及び涅槃の樂を得せしめる。この「苦み」と

四四、我は爲れ如來兩足の尊なり、世間に出入ること猶ほ大雲の如し、一切の枯稿の衆生を充潤して、皆苦を離れて安穩の樂、世間の樂、及び涅槃の樂を

いふ事は大體四苦八苦であるが、能く世間では「宗教は病氣を癒す」といふやうな事だけいふけれども、それは實に愚な言ひ方である、生老病死、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦といふ、この四苦八苦を先づ一括して佛教では苦といふのである、その中には病といふことも無論あるけれども、病だけを指して人生を教ふといふやうなことは、迷信的な劣等な者がやる事で、釋尊の發心の始めから目標とされた所は四苦八苦の人生である、その内に求めて得ざる苦みとか、愛する者と離れるとかいふやうな、どうしても人生に遭遇するものが説かれて居る、如何なる健康體の人でも、如何なる金持の人でも逃れ得ない所の苦痛を説いて、さういふ總ての苦みを離れて安穩の樂を得させる、どういふ事に出會うても精神の平和を破られないのが安穩の樂といふのであ

る。貧乏人に金を與へると云ふやうなやり方は、金は得られたけれども名譽が得られないと成つて來る。「求めて得ざるの苦」と言へば、貧乏人が金を求めて得ざる苦も、金持が名譽を求めて得ざる苦も、それは皆求めて得ざるのは苦といふ包括的の意味の中にあるのであるから、さういふ整うた意味で言はなければ折角の佛敎がまづいものになつてしまふ。吾々はその意味に於て、迷信的に今日日蓮主義の多くの人がやつて居るやうな事は、餘りに釋尊の偉大なる教を貧弱にし過る點に於て反對するのである。必ずしも病氣を癒ることが悪いといふのではないけれども、そればかりが佛敎の利益ぢやと説く點に於て、非常に佛敎を傷けると考へるのである。それはこの經文のやうな説き方にならなければならぬ、「皆苦を離れ」て一切の人生の苦痛を離脱して、ど

ういふ境界に置かれても精神に於ては安穩の樂を得なければならぬ、唯だ外部に於ての幸福ばかりではいけないから、精神生活の上に於て、如何なる境遇に處しても安穩であるやうに、所謂日蓮聖人が頸を斬られる時にも「これ程の喜び笑へかし」と言ひ、佐渡の雪の中に閉ぢ込められても「悦び身に餘る」と言つたのは、この安穩の樂である、加何なる境遇に於ても體驗して居る事をそこに示したもので、眞に尊いことである。唯外部に於て幸福の状態になつて、それを樂みとして居るといふことならば、別に修養も要らなければ宗教も要らない、毛氈を敷いて餅を喰つて、暑い時分に扇風器にても吹かれて居る、眠たくなつたら湯に這入つて寝るといふやうな事であるならば、何も宗教も修養も要らぬ譯である。さういふ場合はかりが人生であるならば、別段宗教な

大僧正本多日生師講述

那先比丘經通解

那先の言く、前に已に王に對して説く、  
是の人は智、諸疑を斷じ、諸善に明かな  
り、那先の言く、譬へば燈火を持して  
冥中の室に入るが如し、便ち其の冥を  
亡す、自明の人の智も是の如し、那先  
の言く、譬へば人の利刀を持つて木を  
截るが如し、人の智を以て諸惡を截る  
も是の如し。

この一節は六善事の第六、智慧の意義を明したの  
である。

王が那先比丘に問ふて云はれるには、智慧と云ふ  
のはどう云ふことを云ふのであるか。那先答へて、  
前に王に對して話申した通りの事である。是の人

は智、諸疑を斷じ、智慧のある人は懷疑の弊を打破  
するものである。随つてその智慧の鏡に映つて善惡  
の分別が明白になつて來るのである。重ねて那先が  
譬へて申すには、燈火を持つて暗き部屋に入るが如  
きものである。即ち燈火の光に依つてその闇を滅ぼ  
す、闇を滅ぼせば其處に在る品物の形が總て明かに  
見得らるるが如きものである。「自明の人」と云ふの  
は、自ら智慧の光明を持つて居る者である。之も他  
力でなく、自ら心の光を頼んで行くから自明の人と  
云ふのである。その自明の人の智は燈火を持つて物  
を見るが如きである。尙那先は譬を擧げて、人の利  
刀を持つて木を截るが如し、能く切れる刀で木を截  
るやうなものである。智慧が鋭く現れて來れば、諸  
の惡を斷じ惡を除くことが出来る。故に斯う云ふ場  
合に言ふ智慧は道德の全部を含んで居る智慧で、儒



教に云ふ睿智である。睿智と云ふのは道德性の智慧である、佛教では之を般若の智慧と云ひ、最も道德に富んで居るものを指して居るのであります。科學の知識は道德と分離したる智慧となつて居る。それが様々なる累を爲して居るのであるから、佛教で云ふ智慧、即ち道德の方から磨き上げたる智慧が大切である事を知らなければならぬ。

王復那先に問ふて曰く、人善を作さんと欲せば前に之を作さんや、後を須つて之を作すべきや、那先の言く、當に前に居て之を作すべし、後に在つて作さば人を益せず、那先の言く、王よ渴する時乃ち地を掘り井を作るも、能く渴を輒めんや否や、飢ゆる時乃ち人を

して耕種せしむるも、穀熟して乃ち食すべきや、急有つて乃ち善を作すも身に益する無し、中正を棄損し不正に就かば死に臨むの時乃ち悔いんのみ。

この一節は善は事の起る前にしなければならぬ。事を爲して後悔すると云ふことではいけない。事前に於て作すやうに心懸ける事を明した文である。王が復た那先に問はれるには、人が善い事をしようと思へば、その事柄に先立つて作すべきか、後れて作すべきか、或は道德的の行爲をするにも人が賛成するのを待ち、段々その事が盛んになつて後から附いて行くべきか、その當時には多少の反對があつても自ら先んじて爲すべきかと云ふ意味を問うたのである。その時に那先が答へて言ふには、善を作す

には所謂善は急げと云ふ諺がある通り、それが善なりと意識された場合には躊躇することは無い。前に居て之を作すべし。事前にならなければならぬ。後になつて善を作してもそれは人を益しない、人がその事をやるやうになつてから後から附いて行けば自分だけの事である。事に先立つてやれば人が見て學ぶのであるから、必らずや善を作すには人に先んじてやるやうに考へなければならぬ。尙那先が申上げるには、譬へて申せば「渴する時乃ち地を掘り井を作るも能く渴を輒めんや、盜人を捕まへて繩と云ふやうな譯で、咽喉が渴してからそろ／＼井戸を掘つても間に合はぬ。又腹が空つてからそろ／＼種蒔きを始め、それが熟してから食するやうな事では手緩い。世の中に於て、善を要求するは頗る急なるものなるが故に、ノロリノロリして居つたのでは人を

益することは出来ない。善は世の中に差迫つて居る要求であるから、善を作すには必らず後れを取つてはならぬ。若しも善を作す者が無くして「中正を棄損し、この「中正」とはその事自身が善を意味して居るので、中は兩邊即ち偏寄る事に對して言ふのであるから、中正なる言葉が已に非常に立派な意味を持つて居るのである。人生に於ても、劣等なる慾望に溺れてしまふのは偏見である、亦餘りに輕んずるのも偏見である。故に正しき現想を以て人生に努力して行くのが中正である、然るに西洋の思想に於ては、中正は不徹底であるとか微温的であるとか云つて、兩偏見を鼓吹して居る、それが文明の大失態である。思慮なき日本の學者はそれにくつ付いてペラ／＼言つて居るけれども、總て駄目である。東洋に於ては、儒教に於ては中庸と云ひ、佛教に於ては中正と云つ

て居る、是が非常に大切な事である。その中正を捨ててしまつて偏見に就いて行つたならば、必ず死ぬ時になつて後悔をするであらう。一時の勢に驅られてあゝ云ふ事をしたけれども、顧みればつまらない事をやつたと茲に涙に咽ぶであらう。死に臨んで悔ゆるとは最も重大なる事を意味して居るのである。死に際に悦びに満ち、一代を追懐して自ら安んずることの出来る程愉快なものはない。唯その時その時の快樂を逐ふて、愈々死に際して、顧みて後悔の涙に咽ぶと云ふことであれば、是程淺ましい事はない。是はその境涯を経て來ないから分らないけれども、分つて見れば是程惻然なものはない。日常の心掛けは死時に至つて總決算として現れて來るのである。故に善は、豫ね々々心掛けて人より先んじてやる、さうして不正を棄てることを注意して行かな

ければならぬ。斯の如く佛教は全然道德教である。然るに在來の儒者が、佛教は道德を無視すると云つたのは無學な話で、恥を千載に曝すものである。是がどうして道德を無視して居ると言へるか。その意味の現れて居るのは一箇所や二箇所でない、殆ど佛教の經典を通じて至る處に斯の如き教訓があるのである。

那先の曰く、王、父及び大父皆此を見ざるも、水天下に定んで此の五百の溪水所聚の處無しと爲すや否や、王の曰く、我れ見ず父及び大父皆此の水を見ずと雖も、實に此の水有らん、那先の言く、我れ及び諸師、佛を見たてまつらずと雖も、其れ實に佛有り、五河水

晝夜に流れて海に入るも、海水亦増減せず、語るに得道の人、道を共にすることを以てするも、能く佛に勝る者有ること無しと説く、是の故に我れ之を信ず。

この一段は佛身に關する事であつて、佛身の實在は肉眼を以て見ることは出來ないけれども、必ず存在し給ふと云ふ事を信ずる。而してその佛陀は洵に尊嚴なるものである事を明して居るのである。

那先比丘が更に申上げるには、王も父及び祖父も皆見ないからと云つて、「水天下に定んで此の五百の溪水所聚の處無しと爲すや否や、」この澤山の河の流れが、是は何處へ聚まるのであるか、縦し見ないにしても何處かに必らず流れ込んで行く處があるに違

ひない事は知り得るであらう。見ない事は知れないと言ふのは愚なるが故にである。水の聚まる處を見ないからと云つて、斯く河の水がどん／＼流れて往つて何處にも聚まる處が無いと思ふであらうか、と言つた時に、彌蘭王が言ふには、我れ見ず、父及び大父皆この水を見ないからと云つても、「實に此の水有らん」水の聚まる處のあるのは一點疑ふことはない。そこで那先比丘が申すには、「我れ及び諸師、佛を見たてまつらずと雖も、其れ實に佛有り、我れも人も佛を見奉ることがないからと云つて、それが爲に佛は無いとは云へない、必ず佛は實在である事を信ずる。縱令河の水が晝夜を分たず流れても、それが爲に海の水は増減しない、語るに得道の人、道を共にするを以てするも、大勢の人が道を語り立派な人が續々現れて來ても、「能く佛に勝る者有るこ

と無し」佛は海の如きものであるから、縱令大河の如き立派な人が出て來ても海に對しては比較にならぬのである。だから私は斯く信じて居る、佛は肉眼を以て見えなくても實在を信じなければならぬ、世の中には偉い人も澤山あるけれども、佛に勝れる者は無い。佛の最尊無上と實在を信する佛教徒の信條が洵に分り易く言つてある。

人の死は但其の身を亡ぼすも、其の行を亡さず、譬へば火を燃して夜書するが如し、火滅するも其の字續いて在り、火至れば復更に之を成ず、今世所作の行は後世成じて之を受くること是の如し。

この一節は惡業の力は永存して滅びない事を明し

る、父母に是の相無ければ佛も定んで是の相無けん、那先の言く、佛の父母是の三十二相八十種好身に金光色無しと雖も、佛は審かに是の相を有したまふ、那先の言く、王曾て蓮華を見しや否や、王の言く、我れ之を見たり、那先の言く、此の蓮華池より生じ、泥水に長ずるも其の色甚だ好し、寧ろ泥水の色に類するや否や、王の言く、池の泥水の色に類せずと、那先の言く、佛の父母是の相無しと雖も、佛は審かに是の相を有したまふ。

この一節は佛身に關して姿の微妙なるを明した

たのであります。この文は日蓮聖人の安國論の中にも引いてありまして、洵に大切な意味を持つて居るのである。

人の死するのは、それは唯肉體が滅びるばかりであつて、その人の爲したる行ひ、即ち業となつて居るものは滅びるものでない。譬へて見れば「火を燃して夜書するが如し、火が消えた時には闇黒になつて字は無いやうに思ふけれども、その字は残つて居るのである、復た火を點すれば元の通り字はそこに存在するやうなものである。この世の中に於て爲したる業は、必らず後の世に影響を及ぼし、それ相當なる果報が成じて、それを受けることは恰度斯の如きものである。之も佛教の通則として古今易らぬものである。

王復言く、人の生子は其の種類に像るのである。

王が尋ねて言はれるには、人の生んだ子は「其の種類に像どる」必らず親に似て居るものである。父母に美しい姿がなかつたならば、その父母から生れた子である佛、即ち淨飯、摩耶二人の中に生れた佛に父母に無い姿があると云ふ事は信ぜられない。父母が普通の人間であつたならば、それから生れた佛様も普通の姿であらうと言つて、佛の美しい相を否認したのである。所が那先比丘が申上げるには、佛の父母には「是の三十二相八十種好身に金色無し」さう云ふ相は無かつたけれども、その子である悉達太子から成道を遂げた佛は審かにこの微妙の相を持つてお在てになる。尙その事に就て申上げるには、王曾て蓮の華を御覽になつたことがありませんかどうですか。王、それは私も見たことがある。那先が

申すには、この蓮華は池から生じたものである、池は泥水である、その泥水の中から出たのであるが、「其の色甚だ好し」甚だ美しい花を開いて居るではないか。若し出て来た所に似るならば泥水の色に似て汚い色でなければならぬ。王が言はれるに、池の水は泥水であるけれども、蓮華は全然それと異なるものである。那先が申上げるに、佛の父母は普通の人間の相であつて、その中から生れた佛は三十二相を有し給うて居る。是は決して淨飯、摩耶の相のみではな

方面の精神が共に満足せなければならぬ。人の心に渴仰の念を起さしむるには、その人は賢く、又善人であり、立派な姿であると云ふ事が伴はなければならぬ。非常にその人は立派な事を言つて居つても、鼻缺けてあるとか眼の球が飛び出て居ると云ふことであらば、語るに當つても威儀を惹かないと云ふのが人情である。御馳走は味さへ美なれば宜いと云ふものではない、汚い器の中に入れてあればさずく感ずるものである。故に佛を渴仰せんとするには微妙の相を信じなければならぬ。近來の哲學者は、姿は實在上に認めないが、それは淺薄なからである。眞宗の坊主は、佛は相なくして唯光のみあるとか、耶穌教の神のやうな事を言つて居るが、其等は實在論の不徹底から起るのである。眞の實在には尊體が永續するのみならず、その人格者として相、智慧、

此等も唯平易に内容を述べたのであるけれども、佛教徒が佛の微妙なる姿を認むるのは、それに依つて渴仰の念を増す所以である。理智の方からは佛の實在を信じ、意志の方からは佛の徳を認め、感情の側からは美を認めなければならぬ。この智情意の三

大藏經要義 一部金壹圓八拾錢十一卷並註釋  
法華經要文 並註釋金壹圓拾錢  
佛敎信仰の正統 金壹圓參拾錢郵稅六錢

### 本多日生現下著書一覽

- 法華經の心髓 金壹圓六拾錢
- 日蓮主義初步 金七拾錢
- 日蓮主義綱要 金壹圓五拾錢
- 修養と日蓮主義 金壹圓五拾錢 (品切れ)
- 國民道徳と日蓮主義 金壹圓五拾錢
- 日蓮聖人正傳 金貳圓貳拾錢
- 日蓮主義綱要 (品切れ)
- 日蓮聖人の感激 金貳圓貳拾錢 (品切れ)
- 日蓮主義の運用 金貳圓五拾錢
- 東洋文明の權威 金貳圓貳拾錢
- 國民敎化 金貳圓貳拾錢
- 法華經の伴 金貳圓貳拾錢
- 思想問題の歸結と法華經 金貳圓
- 聖訓要義 各卷壹圓貳圓貳拾錢
- 開目抄詳解 上卷一部金貳圓八拾錢
- 聖語錄 金貳圓八拾錢
- 優婆塞戒經通解 金八拾五錢
- 大乘本生心地觀經通解 金八拾五錢
- 法華經講義 以上各送料一部金八錢

### 大藏經要義

### 法華經要文

### 佛敎信仰の正統

大藏經要義刊行會  
振替東京三二五九六番

價定一統	
一冊	金壹圓拾錢
一ヶ年	金參圓參拾錢
送料一統	送料共
廣	一頁
告	半頁
料	四分ノ一頁
	金參圓半
	事の金前

大正十一年十一月廿七日印刷  
大正十一年十一月一日發行

不許複製

編輯所 統 編輯所  
發行所 統 發行所  
編輯所 統 編輯所

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可  
大正十一年十月一日發行(第一回)日發行

目 次

法華經の眞價……(其二)	本多日生
國民性に就て……(其二)	武田顯龍
淨土教と厭世思想……(續)	森川日修
日蓮主義より見たる無量義經……(第六回)	井村日成
少年 四	
記事報道十數件	
法華經要文講義(續)	本多日生
那先比丘經通解(續)	本多日生

第廿六年十二月號

